眼鏡の騎士

佐井 識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眼鏡の騎士

【Ｎコード】
Ｎ１２４２Ｎ

【作者名】
佐井　識

【あらすじ】
辺境の貧しい田舎貴族の姫セリスは、美貌を見込まれ、国王の第７妃として輿入れすることになる。その道中の護衛をすることになったハインフェルトは、剣より本が好きで、読書のしすぎで目を悪くし、眼鏡をかけているという半人前の騎士だった。高圧的で無愛想なセリスの秘密と、気弱で生真面目なハインフェルトの事情。それぞれの想いを抱えながら、馬車は走り続ける。はたしてふたりは、無事に目的地まで辿り着くことができるのか！？

第1話：麗しき姫君

「あなた、なに？　顔に貼り付けているその変なもの」

出会ったばかりの相手を見下ろしながら、セリスは尊大に尋ねた。初対面の、しかも異性にそんな態度を取るなど、いくら田舎貴族とはいえ姫君には似つかわしくない。しかもその割に、彼女は自分の質問に対してまったく興味がなさそうだった。ただそこにあるから訊いただけ、とでもいうように。

非現実的な美貌が、その印象に拍車をかける。蜂蜜色の豊かな髪はゆるやかに波打ち、ほの甘い香りを放っている。真っ白な肌に映える長い睫毛。鼻と口は小ぶりで愛らしく、腕のいい職人による精巧な細工のようだ。ベージュのロングドレスには、控えめに金糸の刺繍が施されている。王都の貴族の娘たちがこぞって赤やピンクを着ようとするのとは大違いのシンプルさだ。しかしそれが、逆にセリスの美貌を静かに引き立てていた。

セリスは表情を変えぬまま、片方の眉だけをピクリと動かした。

ハインフェルトは若い女性からこんな待遇を受けたのははじめてだったが、不躾と顔をしかめるどころか、いっそこの外見にはふさわしい、という気がした。

「これは眼鏡というものです」

片膝を着いた最敬礼の体勢のまま、顔だけ上げて彼は答えた。ただでさえ汗かきなのに、大きめの軍服をきっちりと着込んでいるうえ、緊張と土地の暑さとで、黒髪と額の間からひっきりなしに汗が流れた。

濃紺の生地に金の肩章とボタンという組み合わせは、国王の私軍の騎士であるという栄誉を表している。しかし18歳以にしては小柄で童顔のハインフェルトは、軍服を着るたびに、後ろからむりやり背筋を伸ばされているようで、落ち着かない気持ちになるのだった。腰に差した剣も、我ながら不釣り合いな気がしてくる。

「視力を矯正する器具のようなもので、レンズの効果でぼやけたものもくっきり映ります」
セリスからの返事がないので、ハインフェルトは説明を続ける。
「王都を中心に普及し始めています。もとは北方のアルディーヌ公国で生み出されたもので、国内では国王の叔父上であるジェロット卿が最初に試され……」
「変な見た目ね」
案の定、セリスは興味がなさそうに打ち切った。
「はやく行きましょう。今出発すれば明後日の朝には着くんでしょう？　時間をムダにしたくないわ」
言うがはやいか、セリスは扉に向って歩き始めた。カツカツと規則正しい音が、古びた石の床に響く。領主の館の大広間はがらんとしていた。金細工などの装飾はなく、かろうじてステンドグラスが飾られている程度。それすら、長年の日光に変色したのか、ガラスの色が褪せている。あとは、お決まりに並べられた歴代領主の肖像画。皆陰鬱そうな表情をしている。
王都育ちのハインフェルトは、正直言ってここが倉庫だと言われても信じてしまいそうだった。
館の外には王家の紋章がついた馬車が待っている。ハインフェルトはそれに乗ってきたのだ。
「で、ですがっ」
彼がこの館についてまだ１０分も経っていない。セリスの親であるジブクリフ伯に挨拶すらしていない。というより、村の入り口にある見張り小屋の主人（兼農民）と、館を案内してくれた執事（兼農民）以外、土地の人間をみかけていないのだ。
「ジブクリフ伯夫妻は農作業中よ。収穫期だから忙しいの」
ハインフェルトの訴えに気づいたのか、セリスはこともなげに言った。両親のことを名字で呼ぶ娘もおかしいし、娘が旅立つというのに見送りにもこない両親もおかしい。ハインフェルトは困惑する。なにより、領主の姫がこれから国王に嫁ぐというのに、あまりにも

閑散としたこの村は変だ――たとえ貴族領とは名ばかりの、国中から忘れ去られた、辺鄙な貧しい田舎だとしても。
すたすたと歩きながら、思い出したようにセリスが口を開いた。
「そういえば、名前をまだ聞いてなかったわ」
自分から質問しているというのに、振り向くそぶりも見せない。
ハインフェルトはセリスを慌てて追いかけながら答える。
「ハインフェルト・マキシミリアン・ド・クリュールと申します。王都の五爵家のひとつ、クリュール伯爵家の出身です。現在は国王の私軍で書記官を拝命しており、このたびはセリス姫の輿入れを護衛するという重大な任務をおおせつかりまして……」
「あなたの説明っていちいち長いのね」
セリスが玄関ホールの扉を開いた。これも普通、姫が自分ですることではない。
「もっとわかりやすくして。わたし、じっと話を聞くのは得意じゃないの」
「……ハインフェルトです」
精一杯省略して、ハインフェルトはもう一度名乗った。
セリスが振り返る。日光を浴びると、その姿はさらに美しかった。身体の一部が動くたびに、キラキラした粒子が広がるような錯覚をおぼえる。この世のものとは思えない輝きにハインフェルトは息を止め、一拍置いたのち、ずれた眼鏡をかけなおした。
「それでも長いわ、ハイン」
これから国王の第7妃となる予定のセリスを、副王都バルバラまで送り届ける。それが彼の任務だが、なかなか厄介なことになりそうだとハインフェルトは思った。

第2話：無言の旅立ち

「本当に、護衛も侍女もいないのですか？」
ハインフェルトは眼鏡の奥の目を白黒させながら確認した。この質問はこれで3度目だ。首筋からは、先ほど館内にいたときに比べ、さらに汗が吹き出ている。
「何度言わせるの。私ひとりだと言っているでしょう」
馬車の手前で腕を組んでいるセリスが答える。相変わらず表情は人形のように整っているが、少しばかりうんざりした様子だ。傍らには、御者のポールが所在無さげに立っている。ポールは御者一筋20年のベテランだが、さすがの彼でもこんな事態ははじめてのようだった。
「侍女は王宮についてから付けていただけると聞いているし、護衛になるような訓練された男はこの土地にはいないわ」
「ですが、姫……」
しつこく言い募るハインフェルトを冷たい目でみつめると、セリスはこう言い放った。
「何かのときには、あなたがちゃんと護ってくれるんでしょう？」
ハインフェルトは何も言い返せなくなる。確かに、姫を護衛するのが自分の役目だと述べてしまった。
しかしもともとハインフェルトは書記官だ。基本的な騎士の鍛錬は受けているものの、剣の腕を見込まれて護衛を任されるような有能な騎士でないことは、ひょろっとした立ち姿を見れば明らかだった。彼がこの役目に抜擢されたのは、ひとえに地政学に明るいからである。他の都市とほとんど没交渉で、深い森を越えた辺鄙な場所に住まう未来の王妃セリス。その情報の少なさと、肖像画が美しすぎることから、本当に存在するのかどうかも怪しい、と騎士団のなかで噂されていたほどだ。その彼女を迎えに行くという面倒な任務は、ほとんど無理やりな形でハインフェルトに押し付けられた、と

いうのが実際のところだった。
――弱った。ハインフェルトは焦っていた。まさかジブクリフ伯側が姫をたったひとりで送り出すとはつゆにも思わず、御者と自分という、最小限の人員で来てしまった。
道のりは険しくはあるが、それほど治安が悪いわけではない。まっすぐ走り続ければ副王都バルバラに着く。そこで正式な軍の警備隊にバトンタッチし、ハインフェルトはお役御免になる予定だ。
ただ、もしものことがあったら……。
自分は絶対に、この任務に失敗するわけにはいかないのだ。
直立不動のまま目を見開いて呆然としているハインフェルトに見切りをつけたのか、そうこうしているうちに、セリスは黙って馬車の入り口に手をかけた。ドレスの裾をつかみ、今にも乗り込もうとする。
「わーー！　わーー！」
思わず意味不明な言葉を叫びながら、ハインフェルトはセリスと馬車の間に回りこむと、覚悟を決めた表情で言った。
「わかりました、セリス様。ひとまず副王都までお連れするのが私の役目ですから、そこまでは責任を持ってお護りいたします」
目の前のセリスは、当然だろう、という醒めた目でハインフェルトをみつめた。彼はどもりながら必死に言葉を紡いだ。
「しかし未来の王妃ともあろう方が、お、お、大股を開いて馬車に乗り込むなど……」
セリスはじっとハインフェルトを見ている。思わず言葉が尻すぼみになる。頼むから直視しないでくれ、とハインフェルトは念じた。美しい女性には慣れていないのだ。
「じゃあ、どうしろって？」
「そ、そ、それはですね……えっと……」
ポールが身振りで馬車の中を指差す。「踏み台は中にある」というメッセージだったが、余裕のないハインフェルトには届かない。
ハインフェルトは叫んだ。

「私を踏んでください！！！」
一座に沈黙が訪れた。ポールは口を開いて唖然としている。気づいていないのはハインフェルト本人だけだ。
これにはセリスも愛らしい瞳を見開いたが、ややあって、口の端でフッと笑った。
「そうね。じゃ、お願い」

こうして忠義の騎士ハインフェルトは四つんばいになり、姫君に背中を踏んづけられることとなった。
踏まれる瞬間、思わず咄嗟に身構えたが、セリスは雲の上を歩くように軽々と馬車に乗り込んでいった。下を向いているからそんなはずはないのに、裾がふわりと翻るのと同時に彼女の白い足首が見えた気がして、ハインフェルトは無駄に赤面する。
そのとき、遠くのほうにふと人の影を感じた。四つんばいのまま目だけを動かすと、さっきまでまるで人気のなかった館の窓から、こちらを見つめる影がある。それも、ひとりやふたりではない。そのまま視線を動かすと、反対側の建物の窓にも、同じような影をみつけた。
しかしハインフェルトが気づいたことに気づいたのか、影はサッと引っ込んでしまった。
（あれは……？）
「何してるの、さっさとあなたも上がりなさい」
「は、はい！」
立ち上がって膝の砂を払い、ずれた眼鏡を直して、ハインフェルトは馬車に乗り込んだ。一度振り返ったが、村は何事もなかったかのように静けさを取り戻していた。

気持ちの良い音を立て、馬車が走り始めた。
高級な馬車とはいえ、中はそう広くはない。隣に座るわけにもいかないので、ハインフェルトとセリスは向かい合うことになる。微

妙に斜めに座ってみたものの、ハインフェルトは落ち着かない。
セリスが窓の外の景色を見ているのをいいことに、ハインフェルトは汗を存分にぬぐったあと、出発時間を手帳にメモしたりしていた。なので
「一応確認しておきたいのだけど」
と、急にセリスが口を開いたものだから、驚いてペンを落としてしまった。
しかしハインフェルトの失態などどうでもいいように、同じトーンの口調でセリスは続けた。視線は窓の外に向けられ続けている。このあたりは乾いた土が多くを占めるが、ところどころに小さな畑が作られていた。大昔から肥料の乏しい土地で、農業にも狩にもあまり向いていないということを、ハインフェルトは文献で知っていた。
「私が王都に着いた時点で、村に褒賞金が届けられるのよね？」
「そのように聞いております。先日の支度金に加えまして、合計6万ルピーナが国庫より支給されることになっております」
「王妃になってからも、ジブクリフ伯には毎年手当てが出されるのよね？」
「左様です。王妃の順に係わらず支給されます」
ハインフェルトは手元のノートをめくりながら答える。そこにセリスの質問の答えが書いてあるわけではないのだが、こうしていると少しでも落ち着くのだ。
「前々国王が定めた聖リーヴェンシュ憲章第2章15節によれば、“王家に嫁ぐ者・出仕する者の係累に関しては、特別な便宜が図られる。以下の分類によって……”」
「もう結構、充分よ」
またしてもセリスの声に打ち切られた。このあとの条文こそ、韻が揃えられていて美しいのに。不完全燃焼な思いで、ハインフェルトは顔をあげた。
セリスは静かに窓の外を眺めていた。

エメラルド色の瞳に、次々と村の景色が映っては消えていく。無言でそのすべてを焼き付けているように、ハインフェルトには感じられた。

ハインフェルトも外を見やり、気づいた。

遠くなりゆく村の、家の窓や教会の影や木立の隙間から、“彼ら”は馬車が走り去るのを見ていた。

村民たちが、姫の旅立ちをみつめている。

わかっているだろうセリスは、一度もニコリとすることも手を振ることもなく、毅然と見送られていた。

馬車は走り続けていた。

第3話：悪いクセ

村を出発してから、すでにかなりの時間が過ぎただろうか。馬車は順調に走り続けていた。窓の外には、赤茶けた景色がひたすら続いている。すれ違ったのは、ジブクリフ伯領へ向かうと思しき小麦売りの馬車だけだ。

この調子で走れば、日が暮れるまでには次の集落に着ける。そこも村の規模自体は大きくないが、巡礼道に面しているため、宿場はそれなりに揃っている。そこで夕食をとり、一泊する予定だった。すでに何百回も確認したスケジュールを、ハインフェルトはもう一度頭の中でなぞる。

あれきり、セリスはほとんど口を開いていない。革張りの座席とはいえ、走る馬車にずっと座り続けるのは、特に女性には辛いものだ。しかしハインフェルトが何刻かおきに儀礼的に「大丈夫ですか？」と尋ねても、頬杖をついたまま、そっけなくうなずき返されるだけだった。それ以上話すこともなく、車内には気まずい沈黙が充満していた。

「兄様はおしゃべりが下手くそなんだから、お姫様が喜びそうな情報を仕込んでいかなきゃダメ！」

妹のローザ＝クレアの高い声が不意に甦った。１４歳になる妹は、とにかくよく喋る。勝気な性格を象徴するかのごとく、ボリュームの多い赤毛の持ち主だ。緑がかった黒髪のハインフェルトとは、外見も性格もあまり似ていない。いつもそこらじゅうを走り回っては、目をキラキラさせて、王宮の様子を聞きたがる。その元気を兄に分けて欲しいと、母が何度嘆息したことかしれない。

今回の任務へ旅立つ前、ハインフェルトは実家を訪れた。基本的に軍に属する者は決められた休暇しか実家に戻ることを許されていないが、ハインフェルトは例外である。代々に渡って近衛隊長を輩

出してきた王都のクリュール家といえば、中途半端な王族よりよほど格式が高い。実際、ハインフェルトの祖母は前々王の妹君だし、従姉妹はアルファード大公に嫁いでいる。屋敷は、王都の北西の広大な敷地にあった。白を基調とした瀟洒な造りを、「王宮以上の美しさ」と称賛する者もいるほどだ。

「聞いたわよ、ハイン兄様っ！　姫君をお迎えする役目を仰せつかったんでしょう！？」

ハインフェルトが居間でくつろいでいると、彼の帰宅を聞いたらしいローザ＝クレアがドタドタと足音を立てて飛び込んできた。もう１４歳なのだから、淑女らしく振舞ってくれないと困る。

「いいなあ、美貌の姫君！　なんでも相当美しいお方らしいじゃない。そんなお方の相手をするのが、面白味皆無・色気皆無の、ナイナイ尽くしの兄様だなんて……。ああ、王都の男がみんなこうだと思われちゃったらどうしよう！」

どうしよう、などと言う割には、何故か頬を紅潮させ、楽しそうに身をよじらせた。

「何を言ってる。私はただの護衛だから、姫君とおしゃべりなんてとてもとても……」

「だって、道中は馬車にほとんど乗りっぱなしなんでしょう！？　私だったらそんなの、耐えきれない！　女の子は喋ってないと死んじゃう生き物なの。そりゃ、兄様は放っておいても本とブツブツ会話しちゃうような変人だけどっ」

持ち前の明るさのおかげか、何を言っても相手にあまり不快感を与えないのは、この妹の美点と言っていいかもしれない、と気圧されながらもハインフェルトは思った。

「ローザ＝クレア、そんなに興奮しないで。お兄様はお仕事なんですからね」

いつの間にか後ろにいた母が微笑んだ。近衛隊長の夫を持つ彼女は、貴婦人ながら、騎士の仕事をよく理解している。

「確かにお兄様は流行や噂話にはうといし、女性に対してドンくさ

いけど、そのぶんたくさんの知識を持っているでしょう」
何気に、母もかなりひどいことを言っている。
「だ、か、らっ、いったいどこの姫君が、地層の見分け方とか、古代文字の読み方とか、貨幣の起源とかを知りたがるっていうのよー！」
赤い髪を爆発させる勢いで、ローザ＝クレアが叫んだ。
「兄様の話って、そんなのばっかりじゃない！　姫君ならきっと、王都で流行っているドレスの形だとか、ここのお菓子が美味しいとか、侯爵家の誰がイケメンだとか、そういうことが知りたいはずよ。わかった、私が今から教えてあげる。兄様はちゃんとメモして、頭に叩き込んでね。これもきっとお仕事だわよっ！」
最近のトレンドは、胸を大きく見せるエンパイア型のドレス。色はハッキリした赤やピンク。白やベージュは時代遅れよ。裾にふんだんに刺繍を入れると上級者風ね。ガーディの仕立て屋は、身体のラインは綺麗に出るけどデザインがちょっと古臭い。最近独立した仕立て屋ロレント・シンは腕はまだまだだけど、本人がイケメンだから若い女の子はもっぱら通っている。３軒隣にこれまた感じのいい宝石屋があって……。
ローザ＝クレアは得意げな表情を浮かべて話し続けた。彼女が坂を下るような勢いで喋り始めたら、厳格な父ですらなかなか止めることができないのだ。
ハインフェルトの意識はいつのまにか、そんな妹の声を無視して、妄想の世界に没頭していく。ああ、はやく本の続きが読みたい。先日、遥か東国の歴史書をやっと手に入れたのだ。分厚いうえに翻訳が不充分なので読み進めるには苦労するが、自国とはまったく異なる生活様式や政治体制を知るのは非常に興味深い。文字をたどりながら知らない世界が目の前に立ちあがっていくのは、ハインフェルトにとってこの上ない喜びだった。
本のことを考えると、我知らず口元がにやけ、自然と右手を胸に当てていた。うっとりして、瞳は夢みがちに輝き、じっとしていら

れなくなる。ああ、はやく続きが読みたい……。

「なにをウズウズしているの？」

するどい声がハインフェルトの脳天を直撃した。ハッと我に帰ると、そこは馬車の中だった。セリスが無表情でこちらを見ている。相変わらず汗ひとつかかない精巧な美貌だ。

「ウ……ウズウズ、ですか？」

また我知らず意識を飛ばしてしまっていたのだろうか。

「あなたの姿をそう呼ばなくてなんと呼ぶの？　急に身体を震わせ始めたかと思ったら、夢でも見ているような表情になるんですもの。落ち着かないわ」

セリスに客観的に自分の姿を描写され、ツーと冷や汗が流れた。

「も、申し訳ありません……」

ハインフェルトは思いきり頭を下げた。勢いで眼鏡がずれる。

仮にも姫君の護衛として同行しているというのに、そんな醜態をさらしたとは。本のことを考えるといつもこうなる。自分の悪いクセだ。これまで、何度変人扱いされてきたことか。

我ながらさぞかし不気味な姿だったろう。下を向いたまま、彼はどんよりと落ち込んだ。

ところが、セリスの言葉は意外なものだった。

「なにかしたいことがあるなら、ご自由にどうぞ。わたしに気を遣う必要はないわ」

「え？　し、しかし」

「お互いが気まずい思いをしているより、好き勝手していたほうが気がまぎれるでしょう」

ハインフェルトは目をぱちくりとさせた。ローザ＝クレアをはじめ、若い姫君というのは、やたらと周りの人間の手をかけさせたがる生き物だと思っていた。しかしセリスは驚くほど素っ気ない。しかもその素っ気なさは、けっして意地悪や高慢によるものではないらしい。

「それでは、あの……本を読んでも？」
「本？」
ハインフェルトは上着にごそごそと手を入れた。抜き出した右手には、分厚い書物が握られていた。
「読書を」
ハインフェルトは、童顔に満面の笑みを浮かべた。

第3話：悪いクセ（後書き）

ハインフェルト、気持ち悪い男ですね……

「拍手ボタン」を設置してみました。もし気に入られたらポチッと押してやってくださいませ。

第４話：贅沢な身分

昔からハインフェルトは、暇を持て余す、という経験をしたことがなかった。本が一冊ありさえすれば、瞬時に別世界へと没頭することができるからだ。ページをめくっている間は、そのことしか考えられない。めくってもめくっても文字が続くことに、震えるほどの悦びを覚える。はやく読み進めたいような、いつまでも読んでいたいような、ウズウズとした気持ちになる。

とはいえ、読み終えたときの快感は格別だ。最後の一行まで掬い取ったたら、本をパタンと閉じて、ふぅと小さくため息をつく。その瞬間は、得も言われぬ達成感を覚えるのだった。

まだ小さな子供のころ、乳母がおとぎ話を読み聞かせてくれるだけでは飽き足らず、自ら活字を読むようになったのが最初だった。子供向けの本をひととおり読みつくすと、今度は屋敷の蔵書室へ忍び込んで、片っぱしからむさぼり読んだ。歴史、地学、物語、物理、化学、神話、伝記……。名家らしく、クリュール家の蔵書はなかなか充実していた。身長の2倍以上ある本棚に立てかけられた梯子の上で読書に没頭してしまい、偶然通りかかったメイドに悲鳴を上げさせたこともある。

だから、本さえあれば、たいていの状況は気にならない。どれだけ外野がやかましかろうが、どれだけ狭い場所だろうが、ときには寝食の有無すらも。仮にも伯爵家の貴公子という身分の人間としては、珍しい性質であるに違いなかった。

言い換えれば、伯爵家の貴公子として、ハインフェルトには決定的に何かが欠けていた。

ガタン、と馬車が大きく揺れた。ハインフェルトはハッと本から顔を上げる。

「村の入り口みたいね」

はす向かいに座っているセリスが、誰に聞かせるでもなく淡々とつぶやいた。
ハインフェルトは急いで窓の外を確認した。太陽はすっかりオレンジ色にその姿を変えていた。建物が一軒、二軒と見えてくる。村の領内に入ったのだ。
まったく気付かなかった。
「ぶぶ無事に着きまして、姫君におきましては長旅お疲れ様でございました！」
動揺すると言葉がうまく喋れなくなるのも、ハインフェルトの悪いクセだ。
慌てて本を閉じ、左胸のポケットにしまおうとしたとき、セリスの声が車内に響いた。
「ずいぶん面白い本なんでしょうね」
「え……」
ハインフェルトは手を止め、セリスを凝視する。
ぽかんとしているハインフェルトを一瞥すると、セリスはつまらなさそうに顔を窓に向けた。
「目を輝かせたり、首をひねったり、うなずいたり、あなたがあんまり没頭して読んでいるから、よほど有名な物語なのかと思っただけよ」
一呼吸置いてセリスの言葉の意味を理解すると、ハインフェルトはみるみるうちに頬を上気させた。思わず前のめりになる。
「これは、遥か東国の歴史書です！！」
セリスの眉がピクリと動いた。
「すでに１００年ほど前に滅亡した国と言われてまして、この歴史書は我が国でも一時期出回っていたようなんですが、翻訳までついているものは稀なんです。おそらく、学者の私物が流出したんだと思いますが、偶然王都の古物商でみつけたときの興奮といったら……！　挿絵もついているんですが、墨と呼ばれる絵具を使っていて、やはりわが国ではなかなか見ることのない、貴重な資料なんです」

うっとりしながら、ハインフェルトは大切そうに本を掲げた。焦げ茶の表紙はところどころ傷んではいるが、かなりの美品だ。古物商の店頭でみつけたとき、眼鏡を三度かけ直して確認し、打ち震えながら両の腕に抱きしめた一冊である。

「貸して」

「あっ」

白い腕が伸びてきたかと思うと、次の瞬間、本はセリスの手の中にあった。

「……」

片肘をついたまま、セリスは本を膝の上に置いた。細い指が、パラパラとページをめくり始める。もうちょっと丁寧に扱ってくれればいいのにと思いつつも、ハインフェルトは意気揚々と説明を続ける。

「さっきまで、地理に関する項目を読んでいたんです。この国には海ほどの広さの大きな川が2本も流れているそうなんですが、何百年も前の時点で、すでに大規模な運河工事の技術を持っており、国を南北に貫く大運河があったといいます。それによって気候の違う南北の特産物の流通が容易となり……」

「あなた、どうして目が悪いの？」

セリスは本に目を落としたまま、静かに言った。突然の脈絡のない質問に、ハインフェルトはきょとんとする。

「えっと、幼いころから読書をしてまして……母によく注意されたものですが、暗いところで読むことも多かったものですから、それが原因かと」

「高いんでしょう、それ」

「は？」

セリスが何を指しているのかわからなかった。

「眼鏡」

言われてハインフェルトは眼鏡のつるに手をかけた。小さく首をかしげて、答える。

「そうですね、もちろん安いものではありませんね。職人の技術が必要ですし、作り直しにも時間がかかります。今までに2度壊してしまったことがあって、だいぶ不便しました」
1度目は歩きながら読書をしていて、壁に顔からぶつかってしまったとき。2度目は剣術の訓練で、相手の剣が誤って眼鏡に当たってしまったときだ。2度目は割れたガラスでまぶたの横を切ってしまい、今もその傷跡はうっすらと残っている。
「そのときも、実は本のことを考えて、少しボーっとしていたんです。相手の振りに反応するのが遅くなってしまって。訓練試合とはいえ、あと一瞬遅かったら大怪我になっていたかもしれません」
客観的に見ても、自分に非のある事故だった。軽い怪我でよかったと感謝しこそすれ、相手を恨むなどありえない。だが下級貴族の出身だった相手は可哀想なくらい青ざめてしまい、地面に頭がつく勢いで謝罪してきた。彼には申し訳ないことをしたと思う。
ハインフェルトは苦笑してみせたが、セリスは笑わなかった。彼女はじっとハインフェルトをみつめた。その瞳は、本物のエメラルドのように美しく、そして硬質だった。
「伯爵家っていうのは、贅沢な御身分ね」
冷たい響きに、ハインフェルトの笑みが固まる。
「目を悪くするほど本を読めて、剣術の練習中にも本のことを考えて、高価な眼鏡を何度も作り直すことができて」
馬車が村の中心部に入ったらしく、窓の外では賑やかそうなざわめきが広がっている。しかしハインフェルトの耳は、セリスの声に一点集中していた。
「少なくともわたしには、読書にそれほどの意味があるとは思えないけど。……騎士なら、他にすべきことがあるんじゃなくて？」
瞬時に、頬が真っ赤に染まる。セリスを直視できずに、ハインフェルトは思わず目をそらした。
「本が何になる。お前は代々近衛隊長を輩出しているクリュール家

の長男。自分のすべきことがわからないのか」
父の声が遠くで聞こえた気がした。
言われたくなかった。
父とまったく同じことを、初対面の姫君に言われるなんて――。

馬車の歩みがゆっくりとしたものになり、カラカラと車輪の回る音がした。右折するのと同時に、車内に長い日が差し込んでくる。夕陽がセリスの顔をくっきりと映し出した。
一瞬だけ、彼女が怒りとも悲しみともとれない表情をしたように見えたのは、ただまぶしさに目を細めただけのことだったろうか。
「書物は……、剣には及ばないかもしれませんが、役に立つこともあります」
ハインフェルトはなんとか声を絞り出した。
それが精いっぱいだった。
「そう」
こともなげにセリスは答えると、手にしていた本を放ってよこした。
「！」
あわててキャッチする。
「セリス様！」
ハインフェルトは次の瞬間、我知らず口を開いていた。
「私のことを悪く言われるのは構いません。ですが……」
手の中で、本をぎゅっと掴む。
「本を粗末にするのは、やめてくださいっ」
自分が何かを言われるのはいい。ちゃんとわかっている、己が騎士の規範から外れていて、できそこないの人間だということくらい。自分が一番よくわかっている。
だが、読書自体に対しての無礼は許せなかった。
唇を結んだまま、セリスが目を見開く。
そのとき、馬車が止まった。宿に着いたのだ。

ハインフェルトは、ハッと我に返った。のけぞりながら叫ぶ。
「も、申し訳ございません！　とんだご無礼を……！！」
「セリス姫様、ハインフェルト様、着きましたよ」
外側から、ガチャリと扉が開かれた。ポールが白髪交じりのヒゲ面に笑顔を浮かべ、車内を覗き込む。
しかし、ふたりの間の異様な空気に気付いたのか、笑顔のまま静止した。
沈黙を破ったのはセリスだった。
「ありがとう、ポール」
セリスはすっと立ち上がり、手前に座っているハインフェルトには目もくれず、彼の脇を猫のように通り抜けた。あわててポールは踏み台を出し、セリスを地上へと導いた。
姫君が去ったあとの車内は、輝きを失ったように、途端にがらんとした空気になる。
セリスが宿へ向かう足音が聞こえた。だがハインフェルトは馬車に乗ったまま、放心して動けなかった。

父の声とセリスの声が重なって、脳内にこだまする。
セリスの言うとおりだった。
甘やかされて、期待に背いた、一族のできそこない。それが、自分――。

だが、そんな思いも、この任務が終われば。だからなんとしてもセリスを、無事に副王都まで届けなければならない。どれだけセリスが嫌な女であったとしても、それまでの辛抱なのだから。
ハインフェルトはずれた眼鏡のまま、もう一度本を握りしめた。
「あのー……、そろそろ、降りてくれませんか～」
馬車の外では、弱り果てたポールが所在なさげに立っていた。

第5話：姫君の別の顔

ようやく馬車からはいでたハインフェルトがのろのろと宿屋に入ると、すでにセリスは部屋に案内された後だった。安堵のため息をついて、木製のカウンターで手続きをとる。といっても、往路でもこの宿に泊まり、王家の紋章を見せ、充分な前金を渡して予約を取ってあったので、特にすることはない。

ただし、宿屋の人間には、セリスが未来の王妃であることは伝えていなかった。村一番の宿屋とはいえ、大した警備や設備があるわけではない。こんな田舎で何か起きるとは思えないが、素性を知られて面倒なことになるのは避けたかった。考えるのも恐ろしいが、身代金目当ての誘拐なんて可能性もなくはないのだ。できるだけ静かに旅を遂行するつもりだった。

そんなことを思いながらハインフェルトが台帳にサインしていると、気のよさそうな宿屋の主人が相好を崩す。

「先に入ったお客さんは2階の奥のいちばん上等な部屋にお通ししましたよ。いやぁ、それにしても、たいそう美しい方でしたねぇ～」

……思ったそばから目立っているではないか。ハインフェルトはガクリと肩を落とす。が、気を取り直し、王家の騎士らしく威厳をこめて言った。

「さるやんごとないお方です。すでにお話しましたが、くれぐれも失礼のないように。それと、滞在中はできるだけ静かに過ごしたいので、他のお客にも余計な話はしないように」

「いやぁ～、高貴な方っていうのは見かけからして違うってのか、もう天女様かと見間違う別嬪さんですねぇ」

通りのいい声で、主人は構わず喋り続けた。さらには「なあ、ハンナ！　ありゃここ何十年も見てないほどの別嬪さんだったよな」と、奥にいるらしい妻に向かって叫んでいる。「あたしはずっと裏にいるから知りませんよー」と、妻が返せば、「そりゃあ残念だ。

あとでようっく見るといいよ」と主人がまた大声で叫ぶ。声の大きい夫婦だ。
「私の話、聞いてないですね……」
ハインフェルトのつぶやきは、主人には届いていなさそうだ。
いくら童顔で幼い体型とはいえ、仮にも軍服姿なのだからもうちょっと緊張感を持ってもらえないものだろうか。それとも、騎士としての自覚が足りてないからこういうことになるのか……。今日一日ですでにボロボロになった彼の自尊心は、ダメ押しとばかりに踏みつけられる。
しかし主人はハインフェルトの胸の内など露知らず、陽気に話しかけてきた。
「しかも高貴な方ってのは、性格までいいんだねぇ。礼儀正しいうえに、言葉遣いなんかもやわらかくてね。やさしさがにじみ出てるっていうかさ。ああいうのが、本当の姫様っていうのかね」
ハインフェルトはきょとんとし、続いて首をひねった。
「やさしい……？」

――事実、セリスは立派に“お姫様”だった。
「別嬪だなぁ……」
「すげえ上玉だぜ」
「あんな綺麗な人見たことないわぁ……」
客でにぎわう夕食時の食堂にて、彼女を一目見んとする他の客たちの視線とざわめきに囲まれながら、セリスは微笑をたたえたまま、静かにナイフとフォークを動かし続けていた。動作は的確かつ上品で、上流のマナーを完璧に身につけている。スープをひと匙すくって口をつけようとした際など、食堂全体が一瞬静かになったほど、皆セリスに見とれていた。
むしろ、居心地が悪いのはセリスの向かいに座るハインフェルトだ。こんなに見られていては食事もままならない。せっかくの煮込み料理もろくに手をつけていなかった。

本来ならば、部屋で個別に食事をとるはずだったのだ。それが直前になって、主人が「ちょうど大きな仕出しがあって、人手と食器が足りなくなったので、食堂で食べてほしい」と言い始めた。
「急にそんなこと言われても、前金を渡したときに約束したはずですよね？　高貴な方ですから、一般のお客と同じ場所でというのは困ります」
部屋の前の廊下でハインフェルトが焦りながら抗議しても、主人は「いやぁ～、申し訳ありませんねぇ」と、のらりくらりするばかりだ。
「いったい、どうしたの？」
騒ぎを聞きつけたのか、セリスが部屋から出てきた。リラックスしていたのか髪をゆるく束ねて右肩に流しており、そんな姿も美しかった。しかしハインフェルトは、不手際をなじられるのではないかと気が気でない。
ところが、話を聞いたセリスはにっこりと微笑んだのだ。
「それなら仕方ありませんわね。むしろ、活気がある場所のほうが食事も美味しいでしょう。では、すぐに食堂へ伺います」
ハインフェルトは我が目と耳を疑った。
楚々と微笑み、優雅に振舞う目の前の姫君は、先ほどまでの慇懃無礼なセリスと同一人物とは思えない。さすが姫様は話がわかりますね、と主人がにやけながら階段を下りていくのを見届けると、口をあんぐりとしたままのハインフェルトをチラリと見やり、セリスは言った。
「ボーっとしてないで。はやく行きましょう」
「は、はいっ！」
表情こそ優美な笑顔のままとはいえ、その口調はハインフェルトの知っているセリスに戻っていた。眠りから急に起こされた人のように、ハインフェルトは慌てて動いた。

「お味はいかがですかな」
腹の前で手を揉みながら、セリスとハインフェルトのテーブルに現れたのは主人とコック長だ。
「とても美味しくいただいております。旅の疲れがいやされました」
セリスがにこやかに答えると、ふたりの目尻がそろって下がった。
「何もない田舎の村ですがね、ウサギなんかは活きのいいのが獲れるんですよ。酒もたっぷりご用意していますから、遠慮なく言ってください。はは、こんな美しい方なら酒も大喜びだ」
酒に意志はないだろう、とハインフェルトが心の中でぼんやり考えていると、急に話を振られる。
「騎士様もお代わりしてくださいよ。たくさん食べて力つけないとねぇ。うちの料理は滋養たっぷりですから、このへんの筋肉もモリモリになりますよ」
そう笑いながら、主人がハインフェルトの二の腕を大袈裟に叩いた。暗に「騎士のくせにひょろっとしすぎ」と言われている気がして、彼は下を向いて力なく笑った。この会話を、食堂中の人間が聞いていると思うとたまらない。
主人とコック長が去ると、ハインフェルトは小声でセリスに訴えかけた。
「やはり部屋を別にしてもらいましょう。ここではあまりにも……。セリス様もゆっくり食事できないのでは」
しかし、セリスは相変わらず微笑みを浮かべたまま、粛々と食事を続けている。諦めかけたハインフェルトの耳に、ささやくような声が聞こえた。
「大丈夫、見られるのは慣れているから」
ハインフェルトはセリスをみつめた。背筋を伸ばし、微笑みをたたえ、美しい姿勢でフォークを口に運ぶ姿は、どこからどう見ても洗練された立派な姫君だった。
ハインフェルトは自分の皿に目をやる。煮込みを一口すくって食べた。大雑把な田舎料理だが、疲れた身体には沁みた。

「美味しいですね」
「ええ、本当に」
セリスは優雅に微笑んだ。ハインフェルトは遅れを取り戻すように、スプーンを動かし始めた。

第5話：姫君の別の顔（後書き）

普段ファンタジーをあまり読んでないもので、細部（食堂や番台？）の描写がおぼつかない・・・おかしなところがあれば、遠慮なくご指摘くださいませ。

第6話：泥酔

もしかしてセリス姫じゃないですか、と言い始めたのは、薬の行商人らしき男だった。

辺境ジブクリフ伯領にセリスという名の世にも美しい姫君がいるという噂は、このあたりではそれなりに有名のようだ。特に宿屋に泊るような旅商人たちは、古今東西のあらゆる噂を知っているものだ。「言われてみれば」「確かに噂通りだ」という声があがったかと思うと、途端に食堂が新しいざわめきで包まれる。

ちょうど食後のデザートまで食べ終え、セリスとハインフェルトは部屋に戻ろうとしていたところだったのだが、おかげでタイミングを失ってしまった。それどころか、男たちはビールやワインを片手にセリスのもとへやってきた。ハインフェルトが警戒して椅子から身体を浮かすが、彼らは気にする様子もなく、酔った顔を上気させながら馴れ馴れしげに話しかけてきた。

「俺ゃ美人っていわれる姫さんをたくさん見て来ましたけど、あんたほど綺麗な方にはお目にかかったことありませんや」

「たいてい噂ってのは尾ひれがついてるもんでさ、実際見るとそうでもなかったりするんだよな。はかなげな処女姫だって聞いてたのに、本当は四十を超えたしわくちゃのババアだったこともあったなあ」

ダッハッハ、と噴火するような笑い声があがった。ハインフェルトは男たちの品のなさに思わず目眩がしそうになった。彼が属する騎士団も男所帯だから、下品な話に興ずることもある（ただしハインフェルトは黙って聞いているだけだ）。だがそんな話を女性の前で、特にセリスのような姫君の前でするなど考えられなかった。それとも、田舎というのはこういうものなのだろうか？

ところがセリスは怒るでもなく、「まあ……」と手を口にあてながら、はにかんだような笑顔を見せた。その姿に喜んだのか、男た

ちはさらに盛り上がる。
「ジブクリフ伯のセリス姫といや、俺たちのあいだでも幻の存在でしたよ。まさかこんなところで会えるなんてなあ。いったい何をしてるんです？」
「もしかしてあれですかい、ついに王都の貴族様にでも輿入れするんですかい？」
そのとき、ひとりがハインフェルトの軍服に気づいた。
「騎士さんの格好、そりゃ国王の私軍の制服だろ？　もしかして王妃様になるとか！？」
ヒュー！　という歓声が食堂中に響いた。
ハインフェルトの顔から血の気が引いていく。彼の身体は目眩に加えて、今や動悸・息切れの症状まで加わっていた。セリスの素性を隠し通すどころか、もろバレではないか。この旅では何ひとつ、自分の計画通りに進まないのは何故なのだろう。
セリスは無言のまま、にっこりと微笑むだけだ。
「主人！　酒を持ってこい。我らがセリス姫に乾杯だ！！」
客が叫ぶままに、主人がワインの大樽を抱えてきた。彼の表情もまたゆるみきっている。よほどセリスの来訪が誇らしいようだ。
「それでは、王妃様が『宿屋・朝の鳥』に宿泊されることを記念して、今日はこの樽をまるごとサービスします！」
拍手と歓声が沸き起こった。皆が杯を高く上げる。もはやハインフェルトの出る幕はなかった。誰かが高らかに叫んだ。
「王様とセリス姫の幸運をお祈りして、かんぱーい！」
村で３０年続く宿屋『朝の鳥』は、オープン以来もっとも熱い夜を迎えた。

結局、酔っぱらって前後不覚になっている男たちのあいだをすり抜け、宿泊棟に戻ってこれたのは、夜もずいぶん更けた頃だった。ハインフェルトが先導して階段をあがっていく。セリスは無言で付いてきていた。

薦められるワインを「勤務中ですから」と困り顔で辞退するたび、ハインフェルトは「それでも騎士かよ！」と男たちに活を入れられたものだ。一方セリスは顔色ひとつ変えず、しとやかに、だが確実に、汲まれたぶんの杯を空けていった。

誰もがセリスを褒め、讃え、うっとりしたまなざしでみつめた。それを全身で受け止めながら微笑みで返すセリスは、田舎の村の宿屋には不似合いなほど、完璧な姫君だった。その横顔を盗み見ながら、やはり只者ではないとハインフェルトは思う。

セリスの部屋の前に着いた。主人が言ったとおり、角部屋のいちばん上等な部屋だった。隣がハインフェルトの部屋だ。

「本日はお疲れさまでした」

ハインフェルトは振りかえると、一礼する。

「予定よりだいぶ遅くなってしまいましたが、ごゆっくりお休みください。明朝、お迎えにあがりますから」

ところがハインフェルトが顔をあげても、セリスは無言だった。疲れているのかと思ったが、部屋に入るそぶりもない。その場に立ちつくして、うつむいている。失礼かと思いつつ、ハインフェルトは顔を覗き込んだ。心なしか、身体が小刻みに震えている。

――まさか、毒……！？

そう思った瞬間、セリスがハインフェルトにしがみついた。ハインフェルトの両腕をがっしりと掴み、うつむいた頭を彼の胸に預けてくる。

「ひゃ！？」

思わず、少女のような叫び声をあげてしまった。声の主はセリスではなくハインフェルトである。

「……気持ち悪い……」

セリスの口から、ぐったりとした声が漏れた。食堂での毅然とした姿からは想像もつかない展開だ。

「毒を盛られたのでは？　やはりあの中によからぬ輩が……」

ハインフェルトは周りを見回した。廊下はしんと静まり返ってい

るが、もしかしたら誰かが暗闇に潜んでいて、今にもセリスに切りかかって来るような気がしてくる。ハインフェルトは掌にじわりと汗をかいた。

しかしセリスは弱弱しく首を振って、それももう無理だと言うようにうなだれると、小さくつぶやいた。

「……酔った」

「へ？」

「頭がガンガンする。はやく。部屋」

「は、はい！」

ハインフェルトはセリスを抱えたまま、背中で部屋の扉を開けた。

なかば引きずるようにしてセリスをベッドまで運んだあと、ぐったりした彼女を前に、ハインフェルトはオロオロと部屋を歩き回っていた。

「みず……」

「み、水ですね！？　ちょっと待っていてください！」

ため息よりも小さいセリスのうめき声を聞き逃さず、ハインフェルトは叫んだ。部屋を出て隣の自室に駆け込み、水筒を取って戻る。仰向けに横たわるセリスの顔の近くまで、そろりそろりと近づいた。

セリスは起きあがることすら億劫らしく、訴えるような目でハインフェルトを見た。乾いた唇がかすかに動いた。ハインフェルトは床に膝をつくと、水筒の口を開け、セリスの口元へ持って行く。セリスは瞼を閉じた。

「……失礼します」

水筒の先端が、セリスの唇に触れた。

透明な水がゆっくりと溢れだし、赤い唇を伝って、喉の奥へと流れていく。水を飲み込むたびに、セリスの瞼と睫毛がかすかに揺れ、喉がコクリと鳴った。

なんて美しい人なんだろう。

その姿から、ハインフェルトは目を離すことができなかった。泥

酔して苦悶した状態にもかかわらず、セリスはやはり圧倒的に美しかった。夜の闇のなか、ベッドサイドのランプが白い肌を神秘的に照らしている。まるで神殿に横たわる女神。それなら自分は、さしずめ彼女に貢物をする神官といったところだろうか。

「……もういい」

セリスの声で、我に返る。水筒を離すと、セリスは目を閉じたまま少し咳込んだ。それから思いきり眉をひそめると、シーツをかきあつめて顔をうずめた。そのまま、いつのまにか静かになる。ハインフェルトが立て膝のままで動けずにいると、しばらくして規則正しい寝息が聞こえ始めた。

「寝た、のかな」

音を立てないように立ち上がり、セリスを覗き込んだ。とりあえずホッと一息つくと、忍び足で扉へ向かう。とそのとき、「ぅぐぇ」と背後から唸り声が聞こえた。慌ててベッド脇へと戻り、セリスを覗き込んだ。

突然、セリスの腕が伸びて、ハインフェルトの上着の裾を掴んだ。瞠目するハインフェルトだが、彼女自身は夢うつつのようで、相変わらず眉をゆがめている。だが先ほどよりは、幾分かマシになったようにも見えた。

再び規則正しい寝息が戻り、部屋が静かに支配された。

「どうしよう、これ……」

ハインフェルトは上着の裾を掴む指先を見た。しっかりと握りしめられており、むりやり外すのは困難そうだ。というよりそもそも、騎士道ではエスコート以外で自分から姫君の身体に触れるなどという無礼は許されていない。

ハインフェルトは後頭部を掻いてしばし思案したあと、ひとりで小さく頷くと、慎重にベッドの一番端に腰掛けた。そして胸元から本を取り出すと、ずれた眼鏡をかけなおして、ページを静かにめくり始めた。

第7話：噂

見覚えのない天井。目の端でゆらゆらと揺れるランプの炎。知らない部屋の空気。

喉の奥から、生ぬるい生き物がせりあがって来るような気持ちの悪さを感じてセリスが目を覚ましたとき、しんと静まり返った闇がそこにあった。億劫そうに身体を起こしても、夜はだんまりを決め込んだままだ。

一瞬、自分がどこにいるかわからなかった。だが、かすかにアルコールの匂いが鼻をかすめ、セリスは眉間を寄せる。昨晩の宴がぼんやりと思い出された。男たちに囲まれ、注がれるままに酒を飲んだ。キリのいいタイミングを見計らい、食堂を後にして、それから……。

暗闇に慣れてきた視線をゆっくりと脇に移したセリスは、その瞬間目を見開いた。

何故、ここでハインフェルトが眠っている。

横顔からシーツに倒れ込んだような不自然な姿勢で、しかも眼鏡をかけたまま、ハインフェルトはベッドの左上半分を占領していた。小さく開いた口からは、すうすうと寝息が漏れていた。

固まったまま、セリスは記憶の糸をたぐりよせた。どうにも気持ち悪くなって、ハインフェルトにしがみついたのは覚えている。ベッドに運ばせたのも思い出した。しかしだからといって、傍らで無防備に眠られている意味がわからない。

ふとハインフェルトの手元を見やると、読みかけらしい本がしっかりと握られていた。

なんとなく合点がいった。おそらくセリスの様子を見ているうちに、自らも睡魔に耐えられなくなってしまったというところだろうか。軍服を着て、眼鏡をかけたままなのも納得がいく。

思っていた以上に、昨夜は酔いをコントロールできなかった。

セリスは音を立てないように、再びベッドに頭を横たえた。ちょうど真正面にハインフェルトの寝顔があった。セリスは手を伸ばして、彼の眼鏡のふちに触れてみる。分厚いレンズはずいぶん重そうに感じられた。こんなものをつけて歩き回るのはもちろんのこと、そのまま眠るなどセリスには考えられないが、目の前の騎士にとっては顔の一部のようなものらしい。

ふちに触れていた指を、今度はつるに伸ばしてみる。このまま、眼鏡を取ってみたい気がした。

「……変なの」

しかし数秒ほどつるを弄ってから、セリスはそっと指を外した。ハインフェルトは熟睡しているのか、起きる気配はない。セリスはゆっくりと起きあがり、ベッドから降りた。そして部屋の隅に置いた荷物から着替えを探し当てると、静かに部屋から出て行った。

「朝よ。起きなさい」

ハインフェルトの頭上で、毅然とした声が響いた。

誰かが自分を起こしている。ハインフェルトは寝起きは得意ではない性質だが、脳内で鈴を鳴らすようなその声は、自然と耳に入ってきた。ハインフェルトはうっすらと目を開けた。朝の光が差し込んでくる。遠くで鳥が鳴く声が聞こえた。

「起きなさい」

もう一度声が響いた。高く澄んだ美しい声。

これは、セリスの声だ。

「――っ！？」

ガバリと起きあがると、はずみで眼鏡がずれた。ハインフェルトが目をぱちくりとさせたその先、ベッドの下手にセリスは立っていた。すでに身支度を終えたらしく、薄化粧をほどこし、焦げ茶のドレスをまとっている。そして、つんと澄ました表情。一分の隙もない、いつものセリスだった。

「先に朝食を摂ってるから、準備してすぐ来なさい」

ハインフェルトが起きたことを認めると、セリスはくるりと身体の向きを変え、部屋を出ていこうとする。ハインフェルトはあわてて呼び止めた。
「起こしていただくなど、も、申し訳ありません！！　ところで、私は何故……」
セリスは興味がなさそうに振り返り、言った。
「夜中に目を覚ましたら、あなたがそのベッドに寝ていたから。わたしはあなたの部屋を使わせてもらったわ」
それだけ言い残して、セリスはすたすたと出て行った。
残されたハインフェルトは、ベッドの上に正座したまま動けずにいた。思考がクリアになればなるほど、冷や汗が吹き出してくる。つまり自分は、主人と同じベッドで眠ったうえ、さらにはひとりで占領して、セリスを狭い部屋に追いやってしまったのだ。王妃陛下に対して、許されない無礼である。もしも、王宮にバレたりしたら……。
「あいたっ」
しかも不自然な姿勢で眠っていたせいで、身体の節々が痛い。朝から泣きそうになりながら、ハインフェルトはベッドから這い降りた。

新しいシャツに着替えたハインフェルトは、共用の水場へと向かった。奥に行けば男性用の浴場と繋がっている。朝なので風呂は沸いてないはずだが、中から水浴びをしている音が聞こえてくる。暑い季節なので、水でも充分気持ちがいいのだろう。
ハインフェルトは昨晩食事の前に入浴を済ませていたので、今朝は洗面だけだ。眼鏡を外し、冷たい水で顔を洗うと、きりりと冷たい感覚に身体が目覚めていくのがわかった。今日も馬車に乗りっぱなしの一日になるので、できるだけさっぱりしておきたい。
手拭いで顔を拭いていると、2人の男が水場に入って来る気配がした。

「いやー、昨日はお互いよく飲んだな」
「おかげでまだ眠いのなんの。仕事すんの億劫だぜ」
話ぶりからして、昨日セリスを囲んだ男たちのようだった。大声でしゃべりながら浴場に向かっていく。なんとなく挨拶するタイミングを逃し、手拭いから顔をあげられないまま、ハインフェルトはその場でじっとしていた。
「しかしあの姫さんもなあ、もったいないよなあ」
片方の男が言った。
「王妃つっても、6番目とか7番目だろ。ほとんど愛人じゃねえか。あのタヌキジジイ、政治には大して興味ねえくせに、女だけは好きなんだからよ」
もう片方も頷く。
「ほんとだよな。若い女のケツ追っかけてるヒマがあったら、税のひとつでも下げろっつの。あーあ、セリス姫、俺んとこに嫁にきたほうがよっぽど幸せにしてやるのによ」
「バーカ、お前にはもうかかあがいるだろ。姫さんは娘くらいの年じゃねえか」
下品な笑い声が水場全体に響いた。ハインフェルトの背後を通り過ぎる気配がしたが、そこにいるのが彼だと気づかれていないようだ。
「でも国王だって同じくらい年離れてるんだぜ。あんなイイ女好き勝手できるなんて、ほんとうらやましいことよ」
「所詮カネってこった。ジブクリフ伯領のあの状況じゃ……妾同然だろうと、王妃が出れば万々歳だろ」
「体のいい人身御供ってとこだな」
浴場の扉がバタンと閉まる音がした。

ようやくハインフェルトは顔をあげたが、立ちつくしたまま、握った手拭いをじっとみつめていた。
ショックだった。

知ってしまったことではなく、知られてしまっていたことが。
何故なら、それはハインフェルト自身、よく知っていることだから。王宮の中枢に近い場所にいれば、そんな裏事情は誰でも知っている。近衛隊長であるハインフェルトの父が、他の騎士と深刻そうに国王の悪癖を相談し合っていたこともある。私軍として仕えるハインフェルトの目の前で、国王が歳若い妻をはべらせていることすらある。
問題は、知られていたことだ。行商人とはいえ、こんな僻地で商っている粗暴な男たちですら、王妃の実態がなんたるかを知っている。
田舎に住む人たちは皆純粋で素朴で、王家に対して憧れを抱いているものだと、ハインフェルトは信じていた。辺境の姫が王家に輿入れすることは、この上もない僥倖であると。もしかしたら、多くはその通りなのかもしれない。だがおそらく――誰よりもそうであるべき人は、きっと知っているのだ。あの聡明なセリスが、気づいていないわけがないだろう。
自分がいよいよ世間知らずだったことを、ハインフェルトはようやく知った。

第7話：噂（後書き）

浴場の描写が適当ですみません・・・ファンタジーを書かれている
みなさんは、そのへんどうされているのかしら・・・

第8話：貴族の義務

貴族の娘なら、政略結婚は当然のことだ。望まぬ結婚など古今東西ありふれている。高貴で美しい姫は一族の財産とも言える。

それに、当人同士が知らぬまま親が勝手に決めた婚姻でも、皆が皆不幸せなわけではない。ハインフェルトの両親だってそうだ。皆、己の義務を果たしながら、そのなかで生きていくしかない。それが貴族というものだ。

それなのに、ハインフェルトが感じているこの後ろめたさはなんだろう。

セリスが贅沢や目の前の快楽に現を抜かすような、そんな姫君であれば、こんな想いは抱かなかったかもしれない。姫であるがゆえに得られるものを、当然のこととして享受できるような性質であれば。

だが彼女は違う。あの瞳にみつめられると、何もかも見抜かれているような気がしてしまう。隠しているものを突きつけられるような気がしてしまう。

お前は、義務を果たしているのか？と。

――目が合った。

「……なに？」

ハインフェルトの視線に気づいたセリスが、片肘をついたまま、億劫そうに言った。

宿屋の主人や客たちに見送られながら村を出発した馬車は、退屈なペースで走り続けていた。昼食を摂るために次の村に立ち寄るまでは、まだまだ時間がかかる。

「いえ、あの、もしもお疲れでしたら、すぐポールに言って休憩させますので」

「なぜ？　まだ半刻ほどしか経っていないじゃない」　セリスと向

かい合うのがはばかられて、ハインフェルトは馬車の揺れとともに、視線をチラチラと分散させた。
「昨晩、私のせいで狭いベッドでお休みさせてしまったこと、誠に申し訳ありません。王妃様に対するあるまじき無礼を、どのようにお詫びしたらいいか」
「それは別にいいわ」
セリスは顔を窓に向けた。表情が見えないぶん、怒っているようにも、無関心なようにも感じられる。ハインフェルトは続けた。
「それに、二日酔いには、馬車の揺れはよくないのではないかと……」
「余計な心配しないで」
ハインフェルトの発言を、セリスが強い言葉で打ち消した。会話が途切れ、ハインフェルトも押し黙る。すでに馬車は人気のない畦道を進んでおり、規則正しく走る音だけが響いた。これから次の村に着くまで、ひたすら沈黙が続くかもしれない。
だが意外にも、先に沈黙を破ったのはセリスだった。
「昨晩のこと、ポールには言わないで」
ハインフェルトは顔をあげ、セリスを見る。セリスは窓に顔を向けたままだ。
「変に気を遣わせたくないのよ」
だがあなたは、気を遣わせていい立場ではないか。ポールも自分も仕える者なのだから。
それは、村でセリスに出会って以来ずっと感じている違和感だった。誰よりも姫らしいのに、誰よりも姫らしくない。これから王妃になろうというのに、なぜ、たかだか御者にまで逆に気を遣おうとするのだろう。ポールだけではない、昨晩の宿屋でもそうだった。セリスはきっと、あえて注がれるままに酒を飲み続けたのだろう。
ストレートに疑問を口に出す代わりに、ハインフェルトは尋ねた。
「本当は、あまりお酒に強くないのではないですか？」
セリスの肩が小さく揺れたのを、ハインフェルトは見逃さなかっ

た。図星のようだ。
「ご無理をされると、お体にたたります。あのような酒場では、よからぬ輩に毒を入れられる可能性だってあります。大事なお体ですから、もう少し……」
「急に口うるさいこと言うのね」
セリスがハインフェルトに向き合った。護衛の騎士の差し出口を、本格的に止めにかかり始めたのだ。
「王妃に対して、そんな態度を取るの？」
セリスは早々にカードを切ってきた。王妃というキーワードの前では、ハインフェルトが平伏すると知っているのだ。射抜くような瞳の強さに、思わずひるみそうになる。だが、ここで引いてはいけない。ハインフェルトは勇気を出して続けた。
「あなたが王妃で、私が王家の騎士だからこそ、です」
言葉もなく、しばらく両者は見つめ合った。沈黙に押しつぶされまいと、ハインフェルトは汗ばむ掌を握りしめながら、なんとかセリスを見続けた。眼鏡のレンズ1枚が少しだけ自分を守ってくれているように感じる。
おもむろにセリスは馬車の天井を見上げると、ふうと深いため息をついた。
「わたしにそんな態度をとるのは、あなたがはじめてだわ」
針で穴が開けられたように、車内の緊張がほどけ始める。
「それとも、王家の騎士ってみんなそうなの？」
「ど、どうでしょう。部隊がいくつか分かれている上に人数が多いので、正確にはわかりませんが……。ただ同僚には、よく私は変わっていると言われます」
まだ緊張が続くハインフェルトは、バカ正直に答えた。その姿がおかしかったらしい。セリスがふいに表情をゆるめた。
「でしょうね」
その言葉とともに、セリスは笑った。こぼれ落ちるような、無防備な笑みだった。

セリスが笑った。
出会ってから、ふたりきりのときにはじめて見せた笑顔だった。
ハインフェルトの胸の奥が、我知らず跳ねた。
「してよ、王宮の話」
セリスが言った。命令調ではなく、少女が噂話の続きをねだるように。

ハインフェルトは話し続けた。王宮の構造、しきたり、有名人、イベント……。セリスは聞き上手で、最低限の相槌でハインフェルトの話を発展させるのに長けていた。彼女を相手にしていれば、いくらでも話し続けられるような気がする。話は王宮を飛び出し、王都のことにまで及んだ。
「あと妹曰く、最近流行りの仕立て屋があるとかで……。ええと、名前はなんていったかな。気障な感じの名前だったと思います。なんでもそこの主人が若くて美形なので、姫君たちがこぞって通っているのだとか」
セリスが不思議そうな顔をしたので、ハインフェルトはあわてて付け加える。
「大した腕もないのに、そんな理由で繁盛するなど、私には理解しかねますが……」
「若い娘なんて、そんなものでしょう」
自らも若い娘であるにも関わらず、まったくそれを感じさせない口調で、セリスは言った。
「それより、妹がいるの？」
「は、はい。ローザ＝クレアと申しまして、１４歳になるのですが、とにかく元気がよすぎて。まだドレスや噂話に夢中な年頃のようです。セリス様のこともどこで聞きつけたのか、出立前にあれこれと訊かれました」
きっとローザ＝クレアが本物のセリスを見れば、ますます興奮してハインフェルトを質問攻めにしようとするだろう。そのときハイ

ンフェルトがそばにいないことに、地団駄を踏むに違いない。
「あなたとはあまり似ていなさそうね」
セリスがにやりとする。つられてハインフェルトも苦笑した。
「私と妹が反対だったらよかったのにと、昔からしょっちゅう言われたものです。妹もわかっていて、私はよくダメだしされてしまうんです」
「でも、仲はいいのね」
そのとおりだった。ハインフェルトは頷く。
「元気で勝気で手に負えないところもありますが、芯はやさしくてしっかり者なんです」
ハインフェルトの声音に、いつしかほんのりと自虐の色が染みていく。
「もしかしたら私がこんなふうだから、自然としっかり者に育ったのかもしれません。本当に、大違いです」
お転婆な振舞いに手を焼くこともありはしたが、ローザ＝クレアはいつだってハインフェルトの味方だった。
あれはハインフェルトが１３、１４の頃だったろうか、いつものように部屋で読書にふけっていたとき、厳しい表情の父が突然入ってきた。そっと寄り添う母。ハインフェルトはとっさに後ろ手に本を隠したが、読書を控えるようにという父の言いつけを破っていたのは明らかだった。ため息をつきながら本を取り上げようとした父に対して、無駄だと知りながらも、ハインフェルトは首を振って必死に抵抗していた。そのとき、母の足元にいた幼いローザ＝クレアは叫んだのだ。
「『私がお兄さまのぶんまでこの家を守る！』」
喉の奥が嗄れそうになるのを、なんとか抑えながらハインフェルトは続けた。
「なんて、言ったこともあって……」
「殊勝な妹じゃない」
セリスは笑ったが、ハインフェルトはそれ以上の言葉を詰まらせ

た。
　ローザ＝クレアの言葉は、比喩ではなく文字通りの意味だったから。つまり兄の代わりにクリュール家にふさわしい相手を婿に取ると、幼いながらも彼女は誓ったのだ。そうやってクリュール家の娘である義務を果たそうとしている。兄の代わりに。
「……？」
　セリスが怪訝そうにハインフェルトをみつめた。思わず、何もかも話してしまい衝動にかられる。だが、その告白をしたところで、セリスを失望させるだけだろう。昨日言われたばかりではないか、騎士ならすべきことがあると。セリスを無事に送り届ける任務をまっとうするまで、余計なことは言わないでおくべきだと思った。これが騎士として最後の勤めならば、なおさら。
　ハインフェルトは曖昧に笑って、眼鏡をかけなおすふりをした。時を同じくして、馬車が次の村へと入った。

第9話：再会と謎

村は、深い森の入口にあった。ここで昼食を摂ったら、あとはひたすら森の中を進む。森を抜けて反対側は、もう副王都バルバラの領域だ。

馬車から降りると、森特有の涼しい空気がハインフェルトの頬に触れた。王都にも森はあるが、王の別荘地となっている小ぶりなもので、目の前の森とは比べ物にならない。都会っ子のハインフェルトにとっては新鮮だった。

「長時間馬車に揺られたあとは、外の空気が気持ちいいですね」

先ほどの気まずさを打ち消したい思惑もあり、ハインフェルトは明るくセリスに話しかけた。しかしそれに答えることなく、セリスは静かに空を見上げる。そして馬の世話をしているポールに歩み寄り、言った。

「あまり長居はしないほうがいいかもしれないわ」

吹き抜ける風が、セリスのはちみつ色の髪とたわむれていく。森の深い緑を背にすると、セリスの髪はますます輝いた。

「雷雨が来る」

ポールは驚いた顔で空を見上げた。ハインフェルトも右にならう。だが空は見る限り雲ひとつなく澄み渡っていた。ふたりの男は顔を見合わせて首をかしげた。

「どこに雨の気配が……あっ、セリス様」

あとは知らないと言わんばかりに、すでにセリスは無言で食事をとる宿屋へと向かっていた。その後を、ハインフェルトはあわてて追いかけた。

手早く食事を終えて通りに出ると、確かに空は先ほどまでの澄んだブルーから、グレーがかった重い青にその姿を変えていた。

ポールが馬車を引いてくるのを待つあいだ、ハインフェルトは村

の大通りの出店に目をやる。彼らも天候の変化に気づき、いったん店を動かそうとしているようだ。
「あ」
ハインフェルトが何かに気づき、出店へと走った。小さな麻袋を抱えて戻って来る。
時間がないと言っているのに、この男はいったい何を考えているのだろう。呆れるセリスの目の前に、麻袋が差し出された。
「干しいちじく、お嫌いじゃなければ」
セリスの片眉があがる。
「これから森を抜けるまでずっと馬車ですから……疲れたときには糖分が必要かと」
思わずセリスは口をぽかんと開いた。ハインフェルトが照れ笑いする。
「そう、妹に言われていたのを思い出しました」
カラカラと馬車がやって来る音がした。少しだけ染まった頬を気づかれないように、麻袋を素早く奪い取ると、セリスは馬車のほうへと振り返った。
「本当に、変わってるわ」
口の中で小さくつぶやいた。

そのときだった、ハインフェルトの背後にいた中年の女が、セリスに駆け寄ったのは。
「！」
あっという間に女はセリスの腕を掴んだ。ハインフェルトがとっさに腰の剣に手を伸ばす。だが、女の口から聞こえてきたのは意外な言葉だった。
「やっぱり、セリスちゃ……」
振り返ったセリスが瞠目した。女はハッとしたように腕を離すと、あわてて一礼する。そして泣きそうな顔で再びセリスをみつめた。
「ご無礼をお許しください、セリス様」

「何言ってるの、カルラ。かしこまらないで。まさか、こんなところで会えるなんて」
セリスがやさしく女を抱きしめた。女は涙ぐんでいる。
「本当に、ご立派になられて……」
ハインフェルトはただただ呆気にとられていた。セリスが女を抱きしめたまま、ハインフェルトのほうを見る。
「ごめんなさい、先に馬車に乗っていて」
「ですが……」
「ほんの少しの時間でいいから」
そう言われたら頷くほかない。ハインフェルトは先に馬車に乗り込んだ。扉を少し開けたままにして、隙間から改めてふたりを見る。女の年はちょうどセリスの親くらいだろうか。髪は白髪まじりで、貧しい旅装姿だった。
わずかに漏れてくる会話に、聞き耳を立てた。

「とてもお美しくなられて。まさか、本当に王妃様になられるなんて」
カルラはまぶしそうにセリスを見つめた。セリスは微笑む。
「これで村も安泰よ。カルラ、ところでグレゴールは？」
カルラは静かに首を振った。瞬間、セリスの表情がさっと翳る。
「夫は先日、病で亡くなりました。それで、私もあちらの家を処分して、ジブクリフ伯領に戻ろうと」
「そうだったの……」
セリスの脳裏に幼い日々の情景がよみがえる。伯爵に仕える騎士だったグレゴールと、カルラの夫妻。子供がいない彼らは、よくセリスたち兄弟をはじめ、村中の子供の遊び相手をしてくれた。グレゴールはかつて王宮に仕えた経験を持ち、腕のいい騎士だったという。戦いの様子を、子供たちに揚々と聞かせてくれたものだ。
だがそんな穏やかな日々も、もう遠い過去のことだ。
「夫はずっとセリス様のことを心配していました。まだ幼いセリス

様に、いくらなんでも酷なことだと……」
カルラが非難めいた口調になる。だがセリスは静かに首を振って微笑んだ。
「いいのよ、それは。わたしは大丈夫」
遠い空でゴロゴロと雷鳴が響いた。雨がこのあたりに到達するのも時間の問題だろう。
「行かなくちゃ」
「お別れの前に、これを」
カルラが抱えていた鞄から、何やらごそごそ取り出した。布に包まれているその中身は、ハインフェルトの位置からは確認することができない。両手で持って、少し手に余るほどの大きさだった。
「夫が護身用にずっと使っていたものです。セリス様にお持ちいただけたら、彼も喜ぶと思います」
セリスはそれを受け取った。ずっしりとした重みを掌に感じる。これはグレゴールとカルラの、そしてジブクリフ伯領の人びとの重みだ。セリスはそう感じた。
セリスが馬車に乗り込み、馬車が動き出した後も、カルラはずっと手を振って見送っていた。

ますます空は厚い雲に覆われ、午後だというのに夜のような暗さだった。
馬車は淡々と森の道を走り続けている。午前中とは打って変わって、馬車の中は静かだった。セリスは物思いに沈んだ表情のまま、一言も発しなかった。
一方で、ハインフェルトもずっと考えていた。あの女性の言葉と態度は、何を意味していたのか。閉鎖的で貧しく、どこか奇妙なジブクリフ伯領には、いったい何が隠されているというのか。
なにより、セリスは……。
「王都は」
突如、セリスがぽつりと口を開いた。

ハインフェルトが驚いて背筋を伸ばす。
「街中にいろんな国の人や食べ物が溢れていて、夜遅くまで活気があって、誰も飢えることがない素晴らしいところだと」
セリスの言葉は、独白のように車内に響いた。
「そういうふうに聞いているわ」
問いかけられているのかどうか、ハインフェルトは一瞬躊躇した。結論から言うと、それは半分正解で半分誤りだ。治安の悪い場所はあるし、貧民窟もある。ただ地方に比べれば、生活水準が抜群に高いのは事実だろう。
ハインフェルトの言葉を待つことなく、セリスは続けた。
「王都の人たちにしてみれば、ジブクリフ伯領なんて遠い遠い田舎でしょうね」
それは正解だ。貴族領とは名ばかりで、地図にすら載っていないこともある辺鄙で貧しい土地。
「実際、つまらない土地だわ」
いつになく乾いたセリスの声音に、思わずハインフェルトは口をはさんだ。
「でも、自然が豊かで、のんびりとしていて、いいところかと……」
「思ってもないこと言わないで！」
セリスが声を荒げた。冷たい瞳に怒りをにじませ、ハインフェルトを見ている。思わぬ剣幕に、ハインフェルトは息をのんだ。
雷鳴とともに、激しい雨が叩きつけ始めた。
「何もないのよ。それがどういうことか、わかる？　食べ物もお金も仕事も、何もないの」
セリスは口の端をわずかに上げると、皮肉っぽい笑みを作った。
「貧しさを受け入れて諦めながら生きるか、もしくは村を出ていくしかないのよ」
何も言えないハインフェルトの背中に、ぐっしょりと汗がにじんだ。
再びセリスが独白じみた口調になる。

「グレゴールとカルラは、仕事を求めて村を出て行ったの。ジブクリフ伯は騎士ひとり雇う余裕すらなくなっていたから。せっかく腕がいいのだから、農業でなんとか生計を立てるより、大きな街で剣の師範でもするべきだってわたしは言ったの」

ふっとセリスが遠くを見る目つきをした。思い出をたどっているのかもしれなかった。何もない村での日々を。

「もう6年も前のことね……」

ハインフェルトの耳が反応した。

“6年前”。

この任務を仰せ付けられたとき、ハインフェルトはジブクリフ伯領のこと、そしてセリスのことを独自に調べた。王妃になるための公式の調査はすでに終わっていたが、ひとつ腑に落ちないことがあったのだ。

セリスの名前が公式の記録に登場するのは6年前の、王家の使者の報告書だ。5年に1度、各貴族領に王家の使者が赴く。その記録では、「ジブクリフ伯には、セリスという幼いながらに目を見張る美しさの姫がいた」と書かれている。現在17歳のセリスは、それ以前の調査にも名前が載っていてもおかしくないはずだ。だが、どこにもセリスの名前が出てくることはなかった。

さらにハインフェルトは王宮の書庫に閉じこもって、17年前の公式書簡を漁った。貴族に子供が生まれれば、必ず正式な文書で報告があるはずだ。だが別の年にセリスの男兄弟の出生報告はあれど、セリスらしき女児の情報を見つけることはできなかった。

それに。ハインフェルトは思い返す。

館に並んでいた、歴代領主の肖像画。ほとんどの人物が――ブルネットだった。誰も、セリスに似ていない。

息を吸って、ハインフェルトは目の前の姫を見据えた。思いつめた視線に気づいたのか、セリスが訝しそうな顔をした。

「ジブクリフ伯には、男児しかいないはずです」

セリスの流れるようなプラチナブロンドを見た。エメラルド色の瞳を見た。花びらのような唇を見た。白くほっそりとした指先を見た。

何もかも有り得なかった。

ハインフェルトは震えを押し殺しながら尋ねた。

「セリス様、あなたはいったい誰なんですか？」

第9話：再会と謎（後書き）

すみません、ちょっと整合性があわない部分ができて、1話を修正しました・・・些細な部分ですが、はじめから読んでくださっている方には申し訳ありません。

感想、拍手等お待ちしております。

第１０話：雷鳴

セリスはたじろがなかった。少し目を見開いたあと、まぶしいものを見るような目つきになり、きゅっと口角を上げた。
そして、そのままハインフェルトを見つめ返した。
とても優雅に。
「独自に、公式記録や書簡を調べました。でも６年前以前に、どこにもセリス様の名前はみつけられませんでした」
セリスの静かな迫力にひるみそうになりながら、ハインフェルトは訴えた。彼の右手は、自然と左胸に手を当てられていた。上着越しにでも本に触れていると、心が落ち着く。
「意外と有能なのね」
セリスが微笑んだ。
「真面目な話です、セリス様――」
「たとえばじゃあ、わたしの正体は、秘密裏に育てられた凄腕の殺し屋で」
セリスが膝に置いていた荷物の布を開き始めた。先ほど、カルラという女に渡されたものだ。細い指先が、ぐるぐる巻きにされた布を難なくほどいていく。中身が取り出されたとき、ハインフェルトは「あっ」と声を出した。
「王を殺すために、貴族の姫だと偽って結婚しようとしているとしたら……」
セリスの手には短剣が握られていた。革製の鞘からそっと剣を抜きとると、丁寧に磨き抜かれた艶のある刃が現れた。銀の柄には花を象った細工が施してある。一見して、持ち主に大事に扱われてきたことがわかる代物だった。
「あなたはわたしをどうするの？」
セリスは慈しむように短剣を眺めると、流し目をハインフェルトに送った。妖艶な笑みにハインフェルトの背はゾクリと震えた。

それは、剣の扱い方を知っている人間の目線と手つきだった。一介の姫君の持つ気配ではない。飛び跳ねそうな心臓を、上着の胸ポケットに入れた本の上からぎゅっと押さえた。
「もしそうならば、王家の騎士として、計画を止めなければなりません」
セリスが挑むような目を向けた。
「わたしを斬って捨てる？」
ハインフェルトは言葉を失う。
もちろん、とは言えなかった。この姫君を斬るなど、いったい誰にできるというのか。
「……しかるべき手順を踏んで、法廷に引き渡します」
ひねり出した言葉は、小刻みに震えていた。
セリスはじっとハインフェルトを見つめたあと、大袈裟に肩をすくめて苦笑した。
「怯えすぎよ。今のは全部冗談。あなた、本の読みすぎだわ」
セリスは短剣を膝の上に置き、鞘に戻すと、布を再び巻きつけ始めた。ハインフェルトは思わず息を吐く。だが心拍数は上がったままだ。
「この剣はただの形見で、護身用。それとも、これだけで状況証拠になるかしら？」
「いえ、そういうわけでは……」
ハインフェルトはおずおずと答える。短剣を布にしまい終えると、セリスは座席にちょこんと座りなおして、ハインフェルトを見た。
「あなたの言うとおり、わたしはジブクリフ伯の実子じゃない。彼らには娘がいなかったから、６年前に養子になったの。ありふれた話でしょう？」
セリスはあっさりと語った。確かに、貴族に後継ぎがいない場合、近親者から養子を取るのは慣例だった。
「実のご両親は、ご健在なのですか？」
「敬語を使うような相手じゃないわ。普通の農民だもの。今もあの

村で暮らしてるわ」
だが、たとえ田舎だとはいえ、係累ではなく、庶子というわけでもなく、ただの村民の子供を貴族の養子にするとは奇妙な話だ。
それに養子をとるのは、たいてい男児に恵まれなかった場合だ。ジブクリフ伯にはセリス以外に2人も男児がいる。普通ならば、血縁関係のない女児をわざわざ養子にとることはない。
ハインフェルトが納得しかねていると、表情に表れていたのか、セリスが乾いた声音で笑った。
「まだなにか不服？　やっぱりわたしが殺し屋だとでも？」
「い、いえ、ただ」
おどおどとハインフェルトは答えた。
「農民の子がいきなり貴族の姫になるというのは、かなり珍しい話ですから」
セリスは口の端で笑った。そして、小さくつぶやいた。
「わたしが姫になったのは、村民の総意なの」
「それは、どういう……」
ハインフェルトが言葉の意味を聞き返したときだった。
窓の外の闇が真っ白に光った。ふたりが光に反応するよりはやく、地面を揺らすような轟音が森に鳴り響く。かなり近い場所に雷が落ちたらしい。　息つく間もなく、ヒヒーンという悲痛な馬の鳴き声とともに、今度は突然馬車が大きく揺れた。馬が雷に驚き、いきなり立ち止まったのだ。
セリスの座っている後部座席がぐらりと持ちあがり、彼女の身体が宙に浮いた。
「きゃ……」
「セリス様！」
セリスがバランスを崩して、ハインフェルトの側に倒れてきた。自らも身体を揺らされながら、ハインフェルトは両腕を伸ばした。背中が壁にぶつかって、ドン！という音がした。衝撃と痛みに思わず目をつぶる。馬車が止まった。

頬に、やわらかい髪の感触があった。ハインフェルトはゆっくりまぶたを開けた。

目の前に、驚いたセリスの瞳があった。ハインフェルトの腕の中に斜めに倒れ込んだセリスは、彼の膝の上で横抱きされるような形になっていた。彼の肩を握る手が、かすかに震えている。

時が止まったような感覚がハインフェルトを襲う。互いの髪と髪が触れ合うほどの距離で、放心状態でふたりはみつめあった。セリスの瞳に、ハインフェルトの視線が吸い込まれる。

――なんて美しい。

昨夜、泥酔したセリスを抱きかかえたのとは違う胸の動悸に戸惑いながらも、不謹慎だと知りながら、ハインフェルトはセリスの顔から目をそらすことができなかった。セリスもまた、ハインフェルトの腕の中で彼を茫然と見つめ返していた。

完璧に整った造作。繊細な気品。甘やかな香り。額に一滴流れた汗すら、その美貌を台無しにするどころか、花の朝露のごとく美しさを添えるばかりだ。何物も寄せ付けぬ、孤高の気高さ。

ハインフェルトは息を呑む。これだけの美貌を前にすれば、どんな犠牲を払ってでも彼女を手に入れたいという人間は多いはずだ。必要とあらば金貨でも財宝でも、喜んで差しだすだろう。そう、金貨でも、財宝でも……。

刹那、ハインフェルトは、頭を殴られたような衝撃を感じた。

農業や産業のない貧しい村。最も価値を持つものが、少女の美しさだったとしたら？

少女は貴族の養子にされ、大金と引き換えに、父親ほど歳の離れた国王の許へ嫁ぐ。それで村は救われる。

それが「村民の総意」だと、彼女は言ったのだ。

ハインフェルトは戦慄した。セリスの言葉の意味が、刃のように

突き刺さる。
「セリス様、あなたは……」
抱きしめる腕に力がこもった。掠れた言葉が溢れ、眼鏡の奥の瞳が揺れる。
その瞬間、セリスが我に返ったように目を見開いた。そして腕を振り払うと、思いきりハインフェルトの胸を突き飛ばして後ろに身体を離した。
「――しないで」
セリスは取り憑かれたようにハインフェルトを凝視した。仁王立ちで、その顔色は亡霊のように青ざめていた。
セリスが叫んだ。
「同情なんてしないで！！」
瞳に確かな怒りを宿し、肩をふるわせて、めいっぱいの力で姫君は騎士を睨みつけていた。
ハインフェルトはその姿を茫然とみつめていた。
ちがう、と言えなかった。かすれた息だけが力なく空気に溶けていく。
大きな音を立てて、馬車の扉が開いた。雨合羽を着たポールの姿が現れた。
「大変申し訳ございません！！　馬が言うことを聞かず……。お怪我は」
ざあざあと規則的に地面に叩きつける激しい雨音が、彼らを現実に引き戻した。仁王立ちのセリスが、横顔だけポールに向ける。まだ肩で息をしていた。
セリスが何か言うより先に、ハインフェルトの口が動いた。
「……セリス姫は、幸いにしてご無事です」
胸の動悸がおさまらないハインフェルトだが、座席に身体を突き飛ばされたまま、口だけが勝手に動いていた。まるで自分以外の人間が喋っているようだ。
「引き続き、気をつけて走ってください」

「かしこまりました」
ポールが頷いて、扉を閉めて去っていく。
セリスが倒れ込むように座席に尻を着いた。表情は髪に隠れて見ることができない。彼女は両の腕で身体を抱えた。ハインフェルトを全身で拒んでいた。
ハインフェルトは頭を垂れる。馬車が再びカラカラと動き出した。
なんとかして呼吸を落ち着かせようとして、跳ね続けている心臓の上に手をやった。鼓動がドクドクドクと速足なのは、馬車が揺れたせいだけではないはずだ。

この気持ち――同情などでは決してなかった。だけど訂正できなかったのは、なんと言い表わせばいいのかわからなかったから。痛ましさでも、憐憫でもない。ましてや執着でも所有欲でもない、だけど恋慕と呼ぶには淡すぎて、敬慕と片付けるには泡立ちすぎている、この気持ち。
なにひとつ言葉にできないまま、馬車は速度を戻していった。沈黙に覆われた車内で言葉を失ったふたりは、ただ座席に揺られて、森の出口を待っていた。

第１１話：うちあけごと

結局、森を抜けきったのは真夜中過ぎだった。雷雨のせいで大幅に予定が遅れてしまった。

森の出口から副王都の中心街までは、さらに時間がかかる。予約していた高級な宿は中心街にあったが、馬をいったん休ませたほうがいいというポールの意見を汲み、森の出口にある宿屋で休むことになった。副王都のはずれで、人気のないうらさみしい地域だった。

セリスは文句ひとつ言わず、黙って部屋に入った。それどころか、あれから一言も口をきいていない。ハインフェルトと目を合わせることすらなかった。

ハインフェルトはハインフェルトで、セリスに声をかけるタイミングをうかがっては、喉から上ってきた言葉を自分から押し戻すことを繰り返していた。ふたりの間には、苦い沈黙が広がっていた。

森の中は激しく雷がとどろいていたにもかかわらず、こちら側はずっと晴れていたらしい。ハインフェルトは部屋の窓を開ける。外には、乾いた夜空が広がっていた。ハインフェルトは息を吸い込み、吐いた。一息では足りない気がして、何度も深呼吸した。頭にかかるこの靄を払ってしまいたい。だが、呼吸を繰り返すほど、胸の中が真空に近づいていくような気がした。

セリスの姿を思った。自分を突き飛ばしたときの、傷ついた表情。あんな顔はさせたくなかった。

あの瞬間、セリスが必死に積み上げてきたものを、ハインフェルトは壊してしまったのだ。彼女が長い時間をかけて完璧にしてきた「姫君」の仮面を、剥ぎ取ってしまった。悪意があったわけではなくとも、否、悪意がないからこそ、セリスは激高したのだろう。

恵まれた身分。ハインフェルトにとってはそれが普通だった。むしろ、伯爵家に生まれたことを恨んだこともあったし、押し付けら

れる伝統やしきたりには自分なりに抵抗してきた。自分の道を成し遂げるために、必死に努力してきた自負もある。事実、書記官に求められる以上の仕事――主に学術的な業務を、ハインフェルトは自発的にこなして、評価されるようになっていた。

だがセリスが背負っているものを思えば、それもぬるい考えなのだろう。結局、自分は甘やかされている。書記官に配属されたのも、家柄あってこそだ。あれほどハインフェルトに厳しかった父ですら、最終的には頷いたのだ。父の言葉を思い返した。

「王がじきじきに許してくださったのなら、私はもう何も言わない。王妃を副王都まで送り届ける仕事を騎士として立派に勤めあげれば、その後はお前の自由だ。新しい場所で、王の期待にこたえろ」

そう、この任務さえ終われば、ハインフェルトは解放されるはずなのだ。夜が明けて副王都の騎士団までセリスを送り届ければ、待ち望んだ未来が待っている。浮足立ってもいいはずなのに、この後ろめたさはなんだろう。

ハインフェルトは窓辺を離れ、ゆっくりとベッドへ歩いた。サイドランプの近くに腰掛け、胸元から本を取り出す。荒れている感情の波を落ち着かせるには、本を読むのが一番いい。これまでもずっとそうしてきた。別世界へ没頭してしまいたい。文字を追う悦びだけに浸りたい。

パラリ、とページをめくる。だがいつまで経っても、言葉が頭の中に入ってくることはなかった。額に滲んだ汗が落ちて、紙を濡らした。必死にページをめくる乾いた音だけが、部屋に空虚に響いた。

東の空が白んできた頃、ハインフェルトは川のほとりにいた。宿から少し歩いたところにある小さな川だった。なめらかそうな岩をみつけ、腰掛ける。本をパラパラとめくったが、相変わらず意識は文字の列を上滑りするばかりだった。ハインフェルトはため息をついた。

「外で読書するにはまだ早い時間帯よね」

突然、背後から聞こえてきた声に、ハインフェルトは飛びあがった。振りかえると、白いカジュアルなドレス姿で、腕を組んだセリスが立っていた。
「そんなことしてるから、目も悪くなるわけだわ」
「セ、セリス様、なぜ……っ」
悲鳴に近い声が漏れた。
「あなたが出て行く音が聞こえたの」
狼狽するハインフェルトに構うことなく、セリスはすたすたと歩いて、ハインフェルトが座っている左横の岩に腰掛けた。
「お召しものが汚れます」
「いいわよ。昔は泥だらけで遊んでたんだから」
セリスはハインフェルトに顔を向けず、川の流れをみつめながら言った。
「読書の邪魔をするつもりはないから、勝手に続けて」
端正な横顔だった。太陽の光が川面に反射して、輝きが白い肌の上で踊っていた。彼女の出現で、薄いブルーの朝の空気が、より清らかなものになった気がした。美しい光景だった。
ふたりはしばらく黙っていた。セリスは川を、ハインフェルトは手元の本を眺めていた。それから、ハインフェルトが口を開いた。
「本が、読めないんです」
チチチ、と鳥の鳴く声が遠くで聞こえた。
「全然頭に入ってこないんです。こんなことははじめてです」
セリスが前を向いたまま言った。
「だからって、明け方に部屋を抜け出すわけ？」
「状況を変えたら、変わるかなと思ったんです。……でも、ダメでした」
ハインフェルトは丁寧に本を上着におさめた。
「珍しいこともあるのね。今日は雪でも降るんじゃない」
セリスは小さく笑った。視線を交わさぬままの会話は、ハインフェルトに少しだけ落ちつきをもたらした。息をそっと吸って、言っ

た。
「いろんなことを知っていると思っていたんです。読書することで、人より多くのことをを学んできたつもりでした。本の中には、いろんな世界がありました。なにより、剣の練習では得られない自由があった。ただ義務を果たしていく生き方より、もっと違う生き方があるんじゃないかと思っていたんです」
セリスは黙って聞いていた。
「でも、わからなくなりました」
ハインフェルトは顔を上げて、左隣に座るセリスを見た。セリスもハインフェルトを見た。
「セリス様、あなたにお会いしてからです」
風が吹いて木立が揺れた。セリスの髪もゆったりと流れた。
「あなたって普段オドオドしてるくせに、いきなり正面から迫ってくるのよね」
真顔でセリスは言った。
「す、すみません。自覚はないのですが……。道中も無礼ばかりで」
「別に怒ってないわ。確かに失礼だったけど。でも、もうずっと、わたしとそんなふうに話す人はいなかったから」
セリスの口元に微笑が浮かんだ。ハインフェルトはそれを見た瞬間、透明な手に心臓をつかまれたように、なぜか胸が苦しくなった。
「村の人たちは……」
「みんなわたしに遠慮していた。腫れ物に触るように扱われたわ。ジブクリフ伯でさえ。後ろめたいのよ」
養子の姫となったその日から、村でのセリスに対する扱いは変わった。誰も気軽に声をかけてはこなくなった。美しい身体に傷をつけてはならないと、農作業や狩りに参加することも許されなかったから、常に館の中にいざるを得なかった。セリスが姫らしくなればなるほど、彼らは喜んだ。
断わっておくけど、あなた以外にはこんな態度じゃないわよ、と言って、セリスは笑った。

「我ながら、模範的な姫になれたと思うわ。我儘はひとつも言わなかった。だから最後だけ、見送りはしないでってお願いしたの。そのくらい許されるでしょう」
出立の日の奇妙な村の様子に、ようやく納得がいった。
「なぜ、見送りを拒んだんですか？」
言ったあとに、ハインフェルトは愚問だと悟った。頭痛をこらえるように眉間をゆがめて、しかしセリスは微笑んでいた。
「村が好きだから」
彼女の表情を際立たせるように、日の光が差していた。
「決意を乱したくなかったの。きっと、二度と帰れないでしょうから」
たったひとりで村を去る姫。それを陰からみつめる村民たち。セリスは、彼らは、どんな思いを抱いていたのだろう。
再び沈黙が訪れた。
ぽつりとセリスが言った。
「王妃になってからも、会えるわよね？」
ハインフェルトは首を横に振った。セリスの顔が見られなかった。これまでのどの話より、口に出すのに勇気が要った。
「この任務が終わったら、私は騎士の任を解かれることになっています」
川の向こう、丘の下に副王都の街並みが広がっている。その中にある、ひと際高い塔。王立学術院。この国で最も権威のある学術機関だった。
「王のご厚意で、王立学術院に入学を許されました。最低でも5年は研究に専念することになります。その間は、休暇や旅行は制限されます。それに学生の身分では、王宮には立ち入れません」
これを知られたら、セリスをまた怒らせるのではないかと思っていた。だがハインフェルトの予想は覆された。
セリスは一瞬言葉を失っていた。白い肌がさらに白く見えた。だがゆっくりと顔の筋を動かすと、やわらかい光を放って微笑んだ。

「そう、腐っていくのはわたしだけなのね」
音のない静謐な笑みだった。
ぎりぎりと、心臓が締め上げられるようだった。セリスを王宮に閉じ込める代わりに、自分は自由な世界へ旅立つのだ。なんという身勝手。なんという皮肉だろう。
これからセリスの近くにいることのできない自分を、ハインフェルトは悔いた。だけどこれは同情ではない。もっと別の、なにか必死な感情。だがその名前をまだみつけられずに、セリスの顔ばかりを見つめていた。

第１２話：捕らわれた姫君

どちらからともなく立ち上がり、宿へ戻る道をゆっくりと歩き始めた。セリスがつかつかとまっすぐに歩いてハインフェルトを置いて行くことも、ハインフェルトが慌ててそれを追いかけることもない。無意識のうちに互いのペースが揃っていた。

道を踏みしめる音以外は、自然のささめきしか聞こえない。生い茂った森の脇の道を歩きながら、ハインフェルトは道中のことを思い出していた。わずか2日の間に、あまりにもたくさんのことがあったような気がする。

少なくとも、１８年の人生において、ひとりの相手とこれほど深く対峙したのははじめてのことだった。それは読書で体験したどんな感情の起伏とも違っていた。

だけどそんな時間も、もうすぐ終わってしまう。

「すげーな、確かにこりゃ上玉だ」

思考が途切れたのは、後方から突然野太い声が響いたからだった。

ハインフェルトが振り返るより早く、セリスの口から小さな悲鳴が漏れるのが聞こえた。

３人の男がそこに立っていた。シャツにくるぶし丈のズボンというラフな格好。年齢はハインフェルトより4～5歳上だろうか。地元の人間のようだが、堅気には見えなかった。ひとりが、セリスの左腕をがっしりと掴んでいる。

「綺麗すぎて人形みたいだな。なあ、ちょっと相手してくんない」

赤いシャツを着た真ん中の男が言った。リーダー格のようだ。恰幅がよく、不精髭を生やしている。

「離してください」

セリスが慇懃な口調で言った。強く握られているのだろう、握られた部分の腕の色が変わっている。

「離したら逃げるってわかってんのに、離すバカはいないだろ。いいじゃん、ちょっとこっち来て話し相手になってくれりゃあいいんだ」
不精髭の男は、口をゆがめて笑った。息が酒臭かった。他の二人も、ほんのり頬が赤く、目が充血している。
油断していた。背中に流れる汗を感じながら、捕えられたセリスをハインフェルトは茫然と見やった。
あたりに人気はない。宿まで少し距離がある。叫んでどうにかなる状況ではない。
「お話なら、宿で聞きます。離してください」
もう一度、毅然とした態度でセリスは言った。それが気に食わなかったのかもしれない。セリスの左腕が乱暴に引っ張られた。
「わかんねえお姫様だな。気取ってねえで、黙ってついてこいって言ってんだよ」
「……！」
セリスが一瞬、眉間にしわを寄せた。苦痛を我慢しているのだ。ハインフェルトは思わず大声で言った。
「姫を離してください。姫への無礼は許しません」
男たちが、舌舐めずりするようにハインフェルトを見回した。不精髭の男からフッと笑いが漏れる。
「おもしれえ冗談だな。誰が誰を許さないって？　ガキ。それ、王家の軍服みたいだけどよ、似合ってないぜ。お小姓か？」
明らかにハインフェルトをバカにした声だった。残りの男たちもクックと笑った。
ハインフェルトは彼らをまっすぐにらみ返した。
「冗談を言っているつもりはありません。あなた方が、私の立場を認識しているなら尚更。王家に対する反逆は憲法違反です。今すぐ、姫から手を離しなさい」
額には脂汗が浮かんでいた。両足も緊張で小刻みに震えている。だが意外にも、心は冷静になりつつあった。セリスを取り戻す。絶

対に。その気持ちだけが、ハインフェルトを動かしていた。
退かない姿勢に、男たちの笑みが消えた。不精髭の男の声が鋭くなる。
「ああ知ってるよ、王家がクソだってことはな。うるさく取り締まるくせに、自分たちは贅沢してんだ。おまけにお前みたいなガキまで、王家を笠に着て偉そうな口聞きやがる。この女は王女かなんかか？　偉そうでムカつくんだよ。だから、市民の声ってのを教えてやろうと思ったのさ」
「あんたたちチンピラに教えられることなんてひとつもないわ。クズ」
表情は毅然としながら、しかし思いきり侮蔑を込めた声音で、セリスが吐き捨てた。
「このアマ！」
不精髭の男がセリスの髪を引っ張った。もう片方の手で、腰に差していた革袋から剣を取り出す。短剣より一回り大きく、でっぷりとした刃はゆるいカーブを描いている。刃の先をセリスの頬に当てた。
「生意気もたいがいにしとけよ」
白い肌から、赤いしずくが一滴こぼれた。
ハインフェルトは腰から剣を引き抜いた。細く長く、磨き抜かれた王家の騎士の証。大きく息を吐いて姿勢を正した。構える。
この先、もう使うことはないと思っていたのに。
「もう一度だけ言います。セリス様への無礼はゆるさない」
「やる気か？」
不精髭の男は不敵に笑った。セリスを掴んでいないほうの男に目線をくれる。お前から行け、という意味らしい。男は頷くと、右手で太いナイフを握り、腕を高く上げた。
ヒュッ、ヒュッ、と刃が空気を切る音がこだまする。
男はパワープレイを得意としているらしく、乱暴な振りを繰り出

して威嚇してくる。すでにハインフェルトの上着の肩章は、相手のナイフによってえぐられていた。
男の一振りを、ハインフェルトは刃先で受ける。ぐいんと鈍い音を立てて曲がったものの、なんとか防いだ。ハインフェルトの剣はリーチが長いぶん、防御には有利だ。だが、じりじりと後方に追い詰められている。
ニヤリと笑って、男が腕を大きく回した。とっさにしゃがみ込んだハインフェルトの頭部をナイフがかすめる。黒髪がパラリと宙を舞った。
男の脇に隙が出たのを見逃さず、ハインフェルトは斜めから剣を突きだした。ざくっと切れる手ごたえを感じた。男のシャツが破れると同時に、鮮血が散った。
「ぐあっ」
それなりの打撃は加えられたらしい。ハインフェルトの口から思わず安堵の息が漏れる。だが闘いはまだ続いている。案の定、すぐに男はナイフを構え直してきた。

セリスが危惧していたよりも、ハインフェルトの腕は悪くなかった。さすが伯爵家の出身というべきか、腐っても王家の騎士らしく、きちんと教育された太刀筋だ。防御に偏っているきらいはあるが、男に比べて無駄な動きが少ない。一方、相手は酔っているからか、元がそういう性格なのか、隙が多い。乱暴にナイフを振り回しているばかりで、技術的には大したことはない。
ただ、とセリスは思った。体力と体格に差がありすぎる。
ハインフェルトの息は目に見えてあがってきていた。長引けば、どんどん不利になるだろう。
不精髭の男は、闘いを黙ってみつめている。セリスを捕えている男は、「何やってんだ、おめえ！」と大きな声で騒いでいた。相変わらず腕の拘束は強固だが、意識はハインフェルトの側に向いている。

セリスは自由な右腕をそっと動かした。

第１２話：捕らわれた姫君（後書き）

チンピラがステレオタイプすぎてすみません。
闘いのシーンの描写が難しすぎる・・・もう少しだけお付き合いください。

第１３話：本当の気持ち

怒り狂った男が、ハインフェルトに襲いかかる。力任せの切っ先から丁寧に身をかわし続けているものの、ぜえぜえと息が上がっていた。身体中が汗でぐっしょり濡れている。

右足を一歩下げたとき、踵が木の根にひっかかった。一瞬グラつく。とっさに態勢を立て直すも、弾みで眼鏡がずれた。ハインフェルトの集中力が途切れる。男が叫びながら走ってきた。身体ごと押さえて斬りかかるつもりかもしれない。

そのとき、セリスの声が響いた。

「足よ！」

いちかばちか。男の腕が掴みかかる数秒前、ハインフェルトは男の足元に思いきり剣を投げた。

「うああっ！！」

刃先は男の脛に突き刺さっていた。無我夢中で男が剣を引き抜くと、鮮血が溢れだした。アルコールが入っていることもあってか、次から次へ血は溢れる。男はうずくまり、痛みに悶絶していた。

ハインフェルトが剣を拾おうと動いたとき、後方から影が伸びた。ハッとして顔を上げる。いつの間にか後ろに回り込んでいた不精髭の男が、剣を振りかざしていた。

斬られる。ハインフェルトは覚悟した。

「ギャァア！！」

だが、叫び声をあげたのはハインフェルトではなかった。不精髭の男は振り下ろす手を止め、声のほうを振り向いた。ハインフェルトも地面に手をつきながら、同じ方向を見た。

太ももを押さえて崩れ落ちるもうひとりの男。

その後ろに、短剣を手にしたセリスが立っていた。

それは、カルラから渡された護身用の短剣だった。白いドレスに返り血が散っているのも気にも留めない様子で、セリスは不精髭の

男を睥睨していた。
「クソ、ふざけやがる」
不精髭の男が舌打ちした。その間に、ハインフェルトは剣を拾い上げ、態勢を立て直そうとする。だが、男の目が光った。
「甘えんだよ！」
男がハインフェルトに斬りかかった。左腕に向かって刃が振り下ろされる。
「――！！」
激痛がした。衝撃で奥歯と奥歯がぶつかり、身体中を低い振動が駆け巡る。
刃は、袖の外側を大きくえぐっていた。破れた袖から、赤く染まった腕が露出していた。肉の表面を削った程度の怪我だったが、それでも身体中の血液が集まったかのように腕が熱い。
フラついたところを、腹部に男の蹴りが入った。喉の奥から奇妙な声が漏れた。乱暴に地面に転がされる。
「手間かけさせやがって」
「ハイン！」
ぼんやりした頭に、セリスが叫ぶ声が聞こえた。
「おっと、ストップだ」
駆け寄ろうとしたセリスを、不精髭の男が制した。倒れたハインフェルトの身体のそばにしゃがみこんで、剣の刃を首筋に当てる。ひやり、と冷たい感触がした。
「そのまま１０歩下がれ。少しでも近寄ったら、こいつの首を掻っ切るぜ」
セリスは黙って男をにらみ返した。
「強情な態度取ってる場合か？　マジで殺すぞ」
「私のことは置いて、セリス様、逃げてください！」
ハインフェルトの身体がもう一度蹴られる。今度は背中だ。
「殊勝な家来をお持ちだな。じゃじゃ馬なお姫様の代わりになって

くれるってさ」
男が刃先でハインフェルトの首筋を弄ぶ。ハインフェルトはセリスの顔を朦朧と見つめながら、首を振った。
「この男の言うことを聞いてください。そしてどうか、逃げてください」
セリスがゆっくりと、後ろに下がり始めた。
８歩、９歩、１０歩。
「……下がったわ」
「最初っから言うこと聞いてりゃ、こいつも乱暴な目には合わなかったのによ。わかったか？」
男の低い嘲笑が響いた。だが、セリスは笑わなかった。
「わかった」
ただし、逃げてくれというハインフェルトの願いも聞き届けられてはいなかった。
ほっそりした片手が、短剣の柄を持ち直す。
「じゃあ、ここから一歩も動かずに、あんたを殺す」
限りなく透明に近い無表情のまま、セリスは屹立していた。

「な……っ」
男の顔は驚愕の色を隠せず、口をあんぐりと開けた。
しかし次の瞬間、ぶはははは、と狂ったように笑い始める。
「どうやって殺すってんだよ。やってみろよ！」
セリスは静かだった。
「あんたも森の男なら知ってるでしょう？　獲物をどうやって仕留めるかくらい」
短剣を掴んだ右手をすう、と持ち上げる。男の動きが止まった。
「まさか、投げるってのか、正気で？」
「鳥や小動物なら矢を使うところだけど、この距離なら短剣のほうが確実なときもある」
セリスが首を左右に鳴らした。それから顎を軽く上げて、あたり

を静かに俯瞰する。口許に笑みが浮かんだ。
「特に、無駄に図体の大きい生き物なら」
男の顔から生気が引いていく。気圧されているのを振り払うように咆哮した。
「あんたみたいな姫に、できるわけ……」
セリスの目の色が変わった。磁石を瞳の内に収めたような、言い知れぬ吸引力。その鋭い目つきに、ハインフェルトは見覚えがあった。昨晩、馬車の中で。一介の姫君には有り得ない、剣の作法を知っている人間の佇まい。
血の模様が散った白いドレスをまとった姿は、異様な気迫を放っていた。
「その口から心臓まで貫いてやる。悪いけど、狩りの腕には自信あるの、わたし」
狙いを定めて、手首をくいと曲げた。

村の子どもたちの中で、一番運動神経がいいのが自慢だった。
お転婆に大地を駆け回り、獲物を捕えたときの興奮。
両親や年の離れた弟妹に喜んでもらえるのが嬉しくて。
グレゴールに教えられた剣技も、あっという間に上達した。
それもあって、彼とカルラの夫妻は、殊更に可愛がってくれた。
貧しくても、村での暮らしは満たされていた。

だから悲しかった。
いきなり別の角度からでしか、自分を認めてもらえなくなったことが。
輪の中からひとりだけ放り出されてしまったようで。
もう村の一員じゃないみたいで。
それでも嫌われたくなかったから、自分を閉じ込めてきた。
だけど。

「うわあああああああ」
男がナイフを放り投げ、尻餅を着いた。腰を抜かしたまま、ずるずると後ろに引きさがる。
セリスの指が花開き、スローモーションで短剣が離れていく。
その動きは、まるで手品のように美しかった。
短剣は鋭い軌道を描いて、男の真横の地面に刺さった。
「ひっ」
息ひとつ切らすことなく、セリスは歩み寄ってきた。男は目を見開いたまま、ぶるぶると震えている。セリスは男に目もくれずに短剣を抜きとると、ハインフェルトを助け起こした。
「すぐに手当てしないと。はやく宿に戻りましょう」
「セリス様、今のは」
高度な手品、もしくは魔術。そう言われても納得してしまうほど、ハインフェルトはたった今、目の前で起きたことが信じられなかった。
「本気で殺すわけないじゃない。さ、行きましょう」
セリスは唇の片端で笑った。
「あなたという方は……」
ハインフェルトの全身から力が抜けた。
セリスの気迫に呑まれていたのは、あの男だけではない。ハインフェルトも、腕の痛みを忘れるほど見入って動けなかったのだ。セリスの佇まいは、余計なものをすべて削ぎ落したように美しかった。
いったい、なんという姫君に出会ってしまったのだろう。
出会った瞬間からきっと定められていたのだ。この姫君には、とてもかなわない。美しくて気高くて、強くてまぶしい、私の姫君――。

そこからは、絵のように断片的な記憶しかない。
背後から剣を構えた男が駆け寄ってきたとき、セリスの反応が一瞬遅れた。ドレスの裾に脚をとられたのだ。

６年間のブランクはこんなふうに表れるのかと、脳裏を自嘲的な諦念がよぎった。どれだけ切れ味がよくとも、放っておくと錆びない剣はないように、かつての運動神経も、姫であり続けるうちに鈍るのは当然だ。さっきのハッタリが効いただけでも上出来だったのかもしれない。

今ここで死んでも、村に報奨金は出るだろうか。ぼんやりとそんなことを考えた。

だからセリスをかばうようにハインフェルトが飛びだしたとき、セリスには事態が理解できなかった。鋭い刃が、まっすぐにハインフェルトの胸に食い込もうとしている。

何かを考えるより先に、ハインフェルトの足は動いていた。身体の疲れと怪我の痛みは、不思議と感じなかった。むしろ、今まで生きてきた中で最も素早い動作だったような気がする。

目を見開いて立ちつくしているセリスをかばうように、全身を広げた。恐れも、後悔もなかった。

父の言ってきたことが今ならわかる。すべてを投げ出しても、仕えたい誰かがいる。

この気持ちの正体をやっと知った。

セリスを守りたい。

ただそれだけだ。

ナイフは深々とハインフェルトの胸に突き刺さった。

衝撃で身体が浮いた。右手からは剣が、そして顔からは眼鏡が、弾かれるように飛んだ。

ゆっくりと後ろ向きに倒れながら、ハインフェルトはかすんでいく世界を見送った。

第１４話：長いお別れ

ハインフェルトの身体が地面に落ち、ドサリ、と音を立てた。仰向けの身体の中心、左胸の部分からは刃が垂直にそそり立っていた。

「ハイン！！」

セリスがしゃがみこみ、傷に触れないようにしながら腕をゆする。だが、意志のない物体のように、ハインフェルトの身体は微動だにしなかった。

「へ……へへ……」

不精髭の男が、空になった手を浮かせたまま、ハインフェルトを見下ろして立っていた。もはや闘う意味など失って、目の前の何かを破壊することだけしか見えなくなった男。小刻みに震えながら卑しい笑みを浮かべた姿は、ただただ醜悪だった。

セリスが立ちあがり、転がっていたハインフェルトの剣を拾う。次の瞬間、剣先が男の喉仏に突き付けられていた。

「ひぇっ！？」

刃がツー、と首に横線を引いた。肌の表面が薄紙のように切れ、赤い血が流れ出す。

「本気で殺す」

右腕をまっすぐ伸ばして剣を突き付けたまま、整った顔を思いきりゆがめ、セリスは喉の奥から言葉を吐いた。

「全身の皮をまるごと剥いでやるから」

「や、やめ……」

そのとき、後方から人が駆け寄ってくる足音が聞こえてきた。

「お前たちいったい何してる！」

「セリス様、そこにいらっしゃいましたか！　ご無事ですか！！」

ポールや宿の人間たちだった。セリスとハインフェルトがいないのを探しに来たらしい。

「捕まえろ！」

このあたりの土地を管轄している軍の兵隊も呼ばれていたようだ。えんじ色の軍服を着た男たちがバラバラと走ってくるのを確認したセリスは、剣を思いきり男の膝に突き立てた。
「ふがぁあっ！！」
声にならない叫びを上げて、男は崩れ落ちた。

ドレスの裾を翻し、セリスがハインフェルトの元に駆け寄る。やはりピクリともしない。足元には、無残にレンズが割れた眼鏡が転がっていた。
「誰か！」
喉を涸らしながらセリスは叫んだ。
ポールが「セリス様！」と駆け寄ってきた。だが彼もまた、ハインフェルトの胸元を見て、言葉をなくして立ち止まる。
ハインフェルトの瞼は重く閉じられていた。幼さの残る少年のような頬に、セリスはそっと触れた。いつの夜か見たいと願った、眼鏡をかけていないハインフェルトの素顔。でも、こんなのは望んでいない。
「ハイン」
望んでいない。信じられない。
有り得ない。ゆるされない。
自分をゆるせない。
胸から湧きあがってくる感情の渦を必死に押しとどめたくて、セリスはぎゅっと目を閉じた。
ふっと、温かい吐息を額に感じた。
「んん……」
セリスはハッとしてハインフェルトの顔を覗き込んだ。閉じられた瞼がかすかに震え、唇から小さな声がもれる。何かを探すように右腕が動いた。
そして、ゆっくりと瞼が開いた。
「セリス様」

目を開けたハインフェルトが、おぼろげに微笑んだ。
セリスの息は止まりそうだった。凍えた身体に突然湯をかけられたように、安堵と放心と弛緩が一気に押し寄せて、言葉にならない。
もう、何を差しだしてもいいと思った。

とはいえ、決して楽観できる状態ではない。運んで治療しなければ。担架を――、と呼びかけたセリスの目の前で、ハインフェルトがむくりと上体を起こした。
「いたたたた……」
「！？」
剣を胸から生やしているというのに、「いたた」はないだろう。しかしハインフェルトはなぜか胸元を気に留める様子もなく、きょろきょろと周りを見回したあと、「あれ、眼鏡、割れちゃったんですね」とつぶやいた。
「あなた、死にかけてたのよ！？」
「え？　いえ、脳震盪を起こしていただけだと思います」
狼狽するセリスに対し、けろっとした顔でハインフェルトは言った。そして己の胸元を見やり、剣の柄を握ると、思いきり引き抜いた。
「な……っ」
セリスもポールも驚愕の表情を浮かべるなか、ハインフェルトはごそごそと上着の内側に手を入れた。
引っ張り出した右手に握られていたのは、見事に刃型の穴が貫通した本。
「おかげで、ほとんど無傷です。本はダメになっちゃいましたけど」
言葉を失っているセリスに向かって、ハインフェルトは満足そうに笑った。
「……本も、ときには役に立つでしょう？」
返事をするかわりに、セリスは思いきり抱きついた。ハインフェルトは一瞬きょとんとして、それから顔を赤らめながらも、控えめ

にセリスの背中に腕を回した。

「ハインフェルト・マキシミリアン・ド・クリュール国王付き私軍書記官。セリス姫を王都まで送り届ける任務、確かにここで引き継いだ。ご苦労だった」

副王都バルバラの騎士団の本拠地で、警備隊長が鷹揚に笑った。上位の相手に対し、ハインフェルトは神妙に頭を下げた。警備隊長が、左腕に巻かれた包帯を見やる。

「なんでも、姫をさらおうとした賊3人を、君ひとりで倒したらしいな」

「は、はい」

口裏を合わせて、そういうことになっていた。朝の散歩に出ていたところ賊に襲われたセリスを、ハインフェルトが助け出したという筋書きになっている。大嘘だ。

「受勲ものじゃないか。これから学術院のほうに行くと聞いたが、今からでも思いとどまったほうがいいんじゃないのか？」

「いえ、せっかく国王陛下のお許しをいただいた話ですし、父にも一度納得してもらったことなので」

ぼやける裸眼でも、窓の外の王立学術院の塔はすぐにわかった。セリスは王都を目指してまたすぐ出発するが、ハインフェルトは1日留まって諸手続きを済ますことになっている。

「君のお父上は勇猛な騎士だから、今回のことはさぞかし喜ばれることだろう。自慢の息子だな」

ハインフェルトはぼんやりと笑った。今はそうでなくとも、いつかそうなればいいなと素直に思った。

「それにしても、先ほどチラッとお見かけしたが……。セリス姫の美貌は聞きしに勝るな」

警備隊長が関心を押さえきれないというふうに言った。

ハインフェルトは力いっぱい頷いた。

「お美しくて、高貴で、心のお優しい、本物の姫君です」

建物の前の広場に馬車が待っていた。屈強そうな騎士たちが出立の準備をしているのを、ハインフェルトは石段に座って眺めていた。
「セリス様のご出立であられる！」
大きな号令が響いた。慌てて立ちあがって振り返る。
現れたセリスは、副王都で着替えと化粧を施されたらしく、豪奢なロイヤルブルーのドレスをまとっていた。薄化粧でも充分美しかったが、華やかな化粧をすると一層映える。控える騎士たちのどよめきを聞いて、ハインフェルトは訳もなく得意な気持ちになった。
ハインフェルトが突っ立っていると、セリスが近くにいた警備隊長に何か言った。彼は頷くと、ほかの騎士たちを配置につかせ、自分も馬車の脇に控えた。セリスがハインフェルトのそばに歩み寄ってきた。
改めてこういう場で向き合うと、セリスは王妃で、自分は一介の騎士にすぎないということを実感する。ぼろぼろの軍服に包帯姿で、さらに眼鏡もないという状態では、セリスが遠い存在のように感じられた。やけに緊張してしまう。
「とてもお綺麗です、セリス様」
「……あんまり見えてないくせに」
周りに聞こえないくらいの大きさでセリスが言った。ハインフェルトは首を横に振り、微笑んだ。
「いいえ、本当にお綺麗です」
ふたりは黙ったまましばらく見つめ合った。ややあって、セリスが口を開いた。
「あなたには本当にお世話になりました。おかげで無事にここまで旅することができた。ありがとう。この旅のことは、ずっと忘れないわ」
「そんな、もったいないお言葉です」
それ以上何も言えずに、また黙った。握った掌の内側が、じんわりと汗で濡れる。口を開きかけたが、言葉がうまく出てこずに目を

伏せた。
「セリス様、そろそろ……」
警備隊長の声がした。セリスは頷き、馬車のほうへ身体を向けた。
「セリス様！」
思わずその名を呼んでいた。
ハインフェルトは石畳に片膝をつくと、最敬礼の姿で叫んだ。
「私は、私なりのやり方で、自分の義務を果たす方法を探します」
広場にいる騎士たちの視線がハインフェルトに注がれる。だが、ハインフェルトがみつめているのは、エメラルド色のふたつの瞳だけだ。
「そのために必死に勉学します。そして必ず、いつかまたあなたのお役に立ちます」
セリスは驚いた顔を隠さなかった。ハインフェルトは自分の人生を変えた姫の顔を必死に見上げた。
セリスの口元がふっとゆるんだ。右手と左手で、それぞれ親指と人差し指で円を作ると、ハインフェルトの顔に、両目を囲むようにやさしく置いた。
「やっぱりあなたには眼鏡が似合うわ」
そして、これ以上なく優雅に微笑んだ。
この人のためなら死んでもいい、そう思える相手に最後に出会えたことを、ハインフェルトは天に感謝した。
ハインフェルトはそっとセリスの手を取ると、白い甲に淡く口づけた。伯爵家の嫡男、王家の騎士として、寸分の無駄もない動作で。
「……どうぞ、お元気で」
セリスの唇が静かに近づいた。ハインフェルトは目を閉じる。とてもやわらかいものが、額に触れた。溶けてしまいそうだった。
「あなたも」
唇を離したセリスの瞳は、ほんの少しだけ潤んでいた。
どうか愛しい誰かが、ずっと幸せでありますように。離れていて

も、思う気持ちが伝わりますように。

敬礼のポーズのまま、ハインフェルトは去っていく馬車をいつまでも見送っていた。

第１４話：長いお別れ（後書き）

これにて完！・・・って感じですが、実はあと１話だけ続きます。

最終話：それから

「……以上が、セリス様が輿入れする道中の顛末なのでございますよ」

ハインフェルトが語り終えるやいなや、大人しく聞いていた子どもたちがワッと声を上げた。頬を紅潮させ、椅子からずり落ちんばかりに机に前のめりになって質問を投げかけてくる。

「悪いやつらは捕まえられて殺されちゃったの！？」

「それからふたりはほんとに会えなくなったの？」

「わたしもハインフェルト踏めるの？」

９歳の長男アーデルベルト、７歳の長女ケイリア、４歳の次女ヴィオレットが同時に口を開くと、王宮内とは思えない騒がしさだ。ハインフェルトはにっこり笑いながら、丁寧に質問に答えていく。

「アーデルベルト様、この国ではどんな罪人も法廷で裁かれますから、その場で殺されたりなんてことはありません。まあ、他のふたりはともかく、不精髭の男は重い刑が科せられたでしょうね。刑法の勉強は、もう少し大きくなられたら始めましょうね」

アーデルベルトは「裁判見てみたい！」と目を輝かせた。

「ケイリア様、正確に言えば１度だけセリス様にお会いしました。妹ローザ＝クレアの結婚式に出席した際です。でも当時のセリス様は、丁度あなたを身ごもっていらっしゃった時期でしたので、ゆっくりお話しすることはかないませんでした」

「じゃあわたし、お腹の中でハインフェルトに会ってたのね！」

素直なケイリアの反応に、ハインフェルトは笑顔で応える。だが３番目のヴィオレットの質問は、先に回答されてしまった。

「ヴィオレット、由緒正しい姫君は殿方を踏んだりしないものよ」

声の主は、椅子からずり落ちそうになっている次女を後ろから抱きかかえると、正しく座り直させた。

「だってお母様だけ。ずるい」

子どもたちがいっせいに振り向いた。
「わたしはもう時効ってとこね。だいたいあなたたち、『ハインフェルト先生』って呼ばなきゃダメって言ったでしょう。わかった？」
はーい、ハインフェルト先生、と子どもたちが復唱した。母譲りのブロンドを持つ3人の子供たちが並んでいる姿を見るたび、親鳥と雛鳥のイメージが浮かんで微笑ましい。
「ほら、物語の時間はもう終わり。次は外で運動でしょ。行ってらっしゃい」
控えていた侍女が、子どもたちを部屋の外へ連れ出していく。それを見守っていたら、最後に部屋を出るケイリアがひょこっと振り返って言った。
「お母様とハインフェルト先生は、レンアイしてたの？」
眼鏡がずれそうになった。
「こないだ読んだ本に書いてあった。男の人と女の人が好き同士になるの、恋愛っていうんでしょ」
アーデルベルトが「はやく！」とケイリアを呼ぶ声がした。彼女は鈴の音のような声で返事をすると、呼ばれたほうにぱたぱたと走っていった。
「……信じられる？　子どもって、ほんと知らないうちにマセていくんだから」
ハインフェルトは窓際のテーブルに手招きされた。テーブルにはお茶の準備がしてある。
「わたしも年をとるわけだわ」
その口調がおかしくて、ハインフェルトは思わず笑ってしまう。
「笑わないでよ」
「だってセリス様、3人のお子様がいらっしゃるようにはとても見えませんよ。昔とまったく変わらない」
「口がうまくなったじゃない。王立学術院ではお世辞も教えてくれたの？」
セリスが頬杖をついて、にやりとした。

１２年という歳月を経たにもかかわらず、その姿は１７歳のときと同じ、いや王妃としてのオーラが増して、それ以上の美しさだった。ハインフェルトは眼鏡の奥の目を細めた。

結局、５年のつもりがもう１年、もう１年と研究を続け、さらには西国へ留学して戻ってきたら、気づけば１０年以上が経っていた。乞われて新たな役職で王宮に戻ってきたのが昨年のことだ。

「聞いたわよ。あなたの論文を元にした河川工事が成功してるって」

「いえ、あれは共同研究ですし、成功したのもたまたま条件があっただけで」

「３０歳で政務補佐官なんて大した出世じゃない」

出自を差し引いても、確かに異例の抜擢だった。照れ隠しにハインフェルトは紅茶をすすった。

「忙しいのに、子どもの家庭教師なんかさせて悪いわね」

セリスの言葉に、ハインフェルトは首を振って否定する。

「とんでもありません。どのお子様も飲み込みが早くて教え甲斐があります。ところでセリス様、先ほどの話は本当にしてよかったんですか？　詳しいことは省きながらお話ししたといえ……」

窓から見える中庭では、子どもたちが歓声をあげながら遊んでいる。他の王妃の子どもも一緒だった。

「母親が貧しい田舎出身だってことは、知っておいたほうがいいでしょう。どうせ王になれるわけでもないし、子どもたちには現実を学んでほしいのよ」

中庭を眺めているセリスの口許には、うっすらと母親の笑みが浮かんでいた。外見はほとんど変わらないとはいえ、そんな瞬間に歳月の重みを知る。ハインフェルトの知らないセリスの人生が、確然とそこにある。

それは同時に、ハインフェルトもまた同じだけ人生を重ねたということだ。

「近々、子どもたちを連れてはじめて里帰りできることになりそう

なの」
ぽそりとつぶやいた声音には、隠しきれない喜びの色があった。
「それはそれは……！　喜ばしいことです、本当に」
ハインフェルトは１２年前の旅の景色を思い浮かべた。どこまでも続く赤茶けた道。宿屋の喧騒。深い森。小川のせせらぎ。あの夏のことは、今でもありありと思いだせた。
記憶の奥から、車輪の音が響いてくる。
「１２年も経ったのね」
「１２年、経ちました」
ふたりはしばらく、思い出の響きに身をゆだねていた。
向き合ったまま黙っていると、本当に馬車の中にいるような錯覚に陥った。軍服姿の少年とドレスをまとった少女が、特殊な空間を共有している。
何度思いだしても、思いだし足りない。
「ずっと、言わなきゃいけないと思っていたことがあるの」
現在のセリスが言った。瞳がハインフェルトをとらえる。そのエメラルド色を超える美しさを、いまだにハインフェルトは知らない。この瞳に魅入られたら、無条件にひれ伏したくなってしまう。無意識のうちに背筋が伸びた。
「わたし、あのとき――」
ハインフェルトの喉が、コクリと鳴った。
「本を投げて、ごめんなさい」

予想外の言葉だった。
ハインフェルトはセリスをまじまじと見つめた。セリスは頬をほのかに赤らめて、きまり悪そうにしていた。肩の力が抜けた。
「あなたという方は、本当に……」
だから知っていたじゃないか、この姫にはかなわないのだと。
もう軍服は着ていなくても、心はやっぱり、彼女に仕える騎士のままだ。

「それと、もうひとつね」
「なんでしょう？」
苦笑しながら訊き返した。
「恋愛なんかじゃなかったわ」
ハインフェルトの動きが止まる。テーブルの上に空白が生まれた。
セリスはまっすぐに言った。
「もっと、ずっと、特別なものだった」
ハインフェルトは視線を落として、また上げた。その短いあいだに、過去が部屋を横切って行った。
「私も、同じように感じていました」
世界中の文献をあさったって、あの関係を言い表わせる言葉などみつからないだろう。それでよかった。
ハインフェルトは微笑んだ。
「もう、子どもたちが戻ってくる時間ね」
セリスが紅茶のカップを置いた。ハインフェルトもそろそろ会議の招集がかかる頃だ。
「行きましょうか」
「ええ」
ふたり立ち上がり、並んで部屋をあとにした。
今もまだ、馬車は走り続けている。道の続きを。乗り合わせた者同士だけが知る景色を運びながら。

完

最終話：それから（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
以下、蛇足的な後書きとなりますので、ご興味のある方はどうぞ。

処女作『さよならお兄ちゃん』を完成させたあと、しばし「何か書きたいのに、書けるものがない！」という放心状態に陥っていました。
あの作品は数年間温め続けてきたもので、内容的にもシリアスだったので、書き終えてガクッと来てしまったのです。そんなある日、今年流行のナポレオンTシャツを着てふと鏡を見たとき、「眼鏡×軍服」というインスピレーションが降りて来まして、「これだ！！」と・・・。
という感じで完全にキャラありき、設定ありきでスタートしてしまったのですが、前作が映像っぽい情景描写や間接表現に重きを置いた文芸だったとしたら、今度は勢いとキャラ重視のラノベくらいの感覚にしようと決めたので、ベタな展開やキャラをあえて投入したりして、書いてるぶんには割とラクでした。
もうひとつテーマとして決めていたのは、ボーイミーツガールの青春物語を描こうということです。
自分の生き方に自信がない、もしくは諦めてしまっている、立場のまったく違う少年少女が、出会いと別れを経ることで変わっていく。現代だとちょっと気恥ずかしくて手を出しにくいテーマですが、ファンタジーという世界ならば、と思ったのです。恋愛の要素もありますが、それだけじゃないなと思って、こんな結末になりました。
ふたりがくっつくエンドを期待されていた方には、申し訳ありません。

ちなみにセリスは当初もっと性格の悪い高飛車な女の予定だったの

ですが、書いてるうちに結構可愛げのある人になってしまいました。逆にハインフェルトに関しては、「生真面目で幼い少年が、次第に責任感と職業意識に目覚める」という設定だったんですが、終盤あたりちょっとシリアスになりすぎたか？と思って、チンピラにボコボコにされることで相殺しときました（笑）
今後のふたりの関係は、本文中に組み込もうかどうか迷ったのですが、１５年後くらいに、国王が死んでからどうにかなればいいんじゃないかな・・・くらいに考えています。って、もう中年ですけど。

今回は、特にコレといって偏聴していた音楽はないのですが、秋以降だとＫａｔｙ Ｐｅｒｒｙ『Ｔｅｅｎａｇｅ Ｄｒｅａｍ』やＨｕｒｔｓ『Ｈａｐｉｎｅｓｓ』をよく聴いていました。あと個人的にＭａｒｉｎａ Ａｎｄ Ｔｈｅ Ｄｉａｍｏｎｄｓの「Ｉ Ａｍ Ｎｏｔ Ａ Ｒｏｂｏｔ」という曲が、なんとなくセリスのイメージにかぶってます。

ここまで長々とお付き合いくださり、ありがとうございました。
感想・評価等お待ちしております。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1242n/

眼鏡の騎士

2011年8月3日03時11分発行